とある学生の擬似昆虫（ゼクター）

陰陽氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある学生の擬似昆虫（ゼクター）

【Ｎコード】
Ｎ７８９７Ｔ

【作者名】
陰陽氏

【あらすじ】
二年前、学園都市の一角に落下した隕石の影響で学園都市にワームと言う名の怪物が出現し、学園都市に侵攻を始めた。学園都市はワームの討伐の為、７つの昆虫型装置、ゼクターを開発。全レベル５に支給される筈が、支給される前日に全ゼクターが逃亡。ゼクターが適合者を自身の意思で選定し、変身をさせた。結果、適合者が各々の意思でワームを討伐し始める事となってしまう
一端覧祭を控えた学園都市で能力者とゼクターが交差する時、物語は始まる

キャラクター&用語原案（本編と変更の可能性有）

上条当麻／仮面ライダーカブト
高校一年生
隕石墜落当時、現場から美琴と共に奇跡的生還を果たした。中三の時、ワームを始めて目撃。その行動を許せなくなり、とった行動がカブトゼクターから選ばれる理由になる
インデックスと出会ったが、カブトの能力で記憶喪失にならずにインデックスを救出することが出来た
また、喧嘩慣れしている為普通のワーム相手に負けることはまず無く、ライダー相手でも同じ事が言える。

御坂美琴／仮面ライダーガタック
中学二年生
隕石墜落当時は瓦礫の下敷きの状態だった
レベル5になって直ぐに身体検査（システムスキャン）の会場でベルトを渡された。その後ワームと対峙した時にベルトを使用し成体をあっという間に撃破してみせるという成果を見せた
現在は白井達三人と一緒にワームを討伐している
美琴にとって上条は想い人であるが、カブトは自分達の行く先々にいる謎のライダーである

佐天涙子／仮面ライダードレイク
中学一年生
隕石墜落当時は偶然現場近くに迷い込んだ。そして必死に人命救助を行った結果、中学入学当初にゼクターを入手して変身が可能になった
将来の夢はメイクアップアーティストになることでその為の勉強をしっかりしており、初春の軽い化粧程度なら簡単にしてみせる。

自身が適合者である事は隠し、基本的に戦闘は単独で行う。美琴や白井とは根本から違う考えを持っている。サポートは初春が言っていた情報を記憶して使用する

白井黒子／仮面ライダーサソード
中学一年生
隕石墜落当時は寮の近くに隕石が落下して避難した。その時の風紀（ジャッジメント）委員に憧れて後に相当な成果を上げる
ゼクター入手の経緯は風紀委員（ジャッジメント）の活動を認められて選定された
素質は普通であり十分活躍できるが美琴が殆ど倒してしまう為、美琴の危機に合わせて戦闘を行うことが多い

食蜂操祈／仮面ライダーザビー
中学二年生
隕石落下当時は周囲の話からそれの情報を揃えた。
上条が見ても偽装すれば高校生くらいにも見えるくらいの少女
上条がカブトと知っている数少ない人物の一人で上条に情報提供を積極的に行う
ゼクターに選ばれた経緯は上条が目の前で変身して戦っている姿に惚れて自分も力になりたいと思い、能力で無能力武装集団（スキルアウト）を操作して戦っていた所をザビーゼクターが選定し、変身可能になる

妹達（シスターズ）／ゼクトルーパーズ
食蜂の手足となって活動を行う。『実験』は計画こそされたものの、ワームがイレギュラー分子として絶対に無視できないとされた為、ワーム討伐用に再調整されているが、ワームの超高速移動に対応するだけで精一杯で脱皮する前に処理する。
食蜂には自身の意思で従っている。

一方通行／キックホッパー

浜面仕上／パンチホッパー
隕石落下当時はお互い普段どおりに生活していた。一方通行は原作とは経緯が違うがチョーカーを付けている。その経緯はワームとの戦闘で打ち止めを庇い脳に直接のダメージを負った。
お互いに第三次世界大戦までの行動は基本的に原作通り変身できるようになった経緯は一方通行は木原戦で打ち止めを護る為に猟犬部隊（ハウンドドック）から強奪し木原が自身の体をワームに改造して言わば人工ワームとなった状態の木原と戦闘して見事勝って見せた
浜面は麦野戦にて滝壺を護る為に変身をした。変身して尚も麦野とほぼ互角と素質は低いがいざとなるととんでもない位強くなり、最終的に六枚羽と何体かのワームを一時間足らずで全滅させるほど強くなった

???／仮面ライダーケタロス
???／仮面ライダーヘラクス
???／仮面ライダーコーカサス
『外』に漏れた技術から作られたゼクター。他のライダーと比べ違う点は
・クロックアップに絶対の制限時間があり、普通のライダーより負担が大きい
・防御力が低い
と言う点であり、武装でそこらへんは補われている。

???／仮面ライダーダークカブト
唯一『外』のライダーで完成したゼクターで変身するライダー
ほぼ全てのライダーとほぼ互角であり、初戦では上条を圧倒して見せた。

初春飾利
中学一年生

隕石墜落当時は寮でテレビを見ていた
対応ゼクターは無いがゼクトから支給された装備で時間稼ぎ位はできる。戦闘時は特殊カメラを現場に飛ばして美琴達のサポートを行うが、ライダー相手となるとサポートが困難になる

敵
ワーム
二年前の隕石に入っていた物質と学園都市の虫が反応を起こして誕生した怪物
対象を殺して擬態する能力を持つ。
擬態しているが故に虫であった時には無い知性が身につき十人十色といった状態である
二段階存在し蛹体から成体になる。成体は肉眼で察知できないくらいの速度で動き回れる

ネイティブ
ワームの亜種
ワームとほぼ何も変わらないがワームより強い固体が多い。
ゼクターの技術はネイティブがワームに対抗する為に学園都市に情報を齎したのがきっかけとなって開発された。ネイティブの提案によりアレイスターのプランにワームの討伐は組み込まれたものの、随分とアバウトな内容になっている（例：Ｘ月ＸＸまでに〜Ｘ体と戦闘させる）

用語
マスクド・ライダーシステム
対ワーム用に作られた兵器。
昆虫がモデルになっており、ワームとほぼ互角かそれ以上の戦闘が行える。

学園都市内で極秘裏に開発されたシステムだが、『外』に漏れた事で世界中の首脳に知られる事なるが、学園都市を解体しようとすればワームが漏れ出す為どうしようもない状態になってしまう。『外』で発生したワームは『外』のライダーが倒している

クロックアップ
マスクド・ライダーシステムに組み込まれている装置。
肉眼では捕捉不可能な速度で動き回りワームの成体を相手に出来るが、ゼクターが適合者の負担を考えて自動的に解除される

ＺＥＣＴ（ゼクト）
マスクド・ライダーシステムを生んだ会社で学園都市内にのみ存在している。食峰はここに属し、妹達もここで生活している。ゼクターを回収しようとする部隊が以前あったが、ガタックゼクターを最初に回収に失敗し壊滅した。
現在は食峰と妹達で構成される特殊部隊『シャドウ』、白井、美琴に様々な指令を送る。
中にはここに属していないライダー（上条、佐天、浜面、一方通行、『外』で開発されたライダー）を危険視している社員もいる
社長は極僅かなものにしか知らされておらず、表の社長として根岸社長としてが勤めている

『シャドウ』
ゼクトを母体とする特殊部隊
妹達と食峰のみで構成される。ザビーゼクターの資格所持者がリーダーを勤めている。ゼクトが母体とは言え、基本的に資金を供給される程度の関わりしかない。
独断で動くもあれば、通報で動く事もある。また、上条を裏からサポートしている。

擬態（ドッペルゲンガー）事件

同じ時間帯に同じ人間が違う場所で目撃される事件
大抵どちらかがワームとして活動を開始する事もあるが基本的に殆どの人間には見分けが付かないが、体のどこかに肌の一部が人間ではありえない緑になっている部分があり、それがワームの証拠であるが基本的に晒し難い（背中や腹部）部分にあることが多く、見分けるのに特殊な装置が必要
この事件でワームに擬態能力があることが発覚した

ワームストーン
ＺＥＣＴから販売されているワームを発見する石。
色は緑色をしており、近くにワームがいると赤くなる。最初は出荷から販売へ順調だったが、現在は出荷トラックが突如爆発をして販売不能になる事件が相次いでいる

キャラクター&用語原案（本編と変更の可能性有）（後書き）

とりあえずここまでが大まかな設定となります。オリキャラを考えた際はその都度書きたいと思います

第一話「仮面ライダーのいる街」

それは二年前の出来事だった
突如として巨大隕石が学園都市に墜落し周囲を瓦礫の山に変えた。
「一体……何が……？」
中学二年生の上条当麻は現状が理解できなかった。確かに今までの不幸で大きな事件が起こることはあったが、周囲一体を瓦礫に変えるほど大きな事は起こっていない。上条は瓦礫の下敷きになり必死に動こうとするが瓦礫の重量のせいで上手く動けない。そして目の前には一人の少女がいた。瓦礫の下敷きになって顔しか見えないが肩にかかる位の茶髪のショートカットで整ったか顔立ちだがあからさまに小学生だ。上条は必死に今手を伸ばしている。そしてその少女も手を伸ばして後少しで手が届く所だった
「後少し、あと少しだ……」
やっとの思い出上条と少女の手が繋がれ上条が少女を引き上げる。少女は能力者らしく能力で何とかして退けると上条も立ち上がる
「サンキュー。お前、名前は？」
「私？私は御坂美琴。レベル４なの。貴方は？」
「俺は上条当麻。レベル０だけど十分今を楽しんでる」
御坂美琴と名乗った少女の手を引いて上条はその場から避難すると避難所で待機していた医療チームの治療を受け美琴とは避難所でよく会うようになった。出逢いが瓦礫の下という最悪の状態だったが、上条は初めて親友（トモダチ）と呼べるものを手に入れられてその時はかなり嬉しかった。

そして時は流れ現在、風紀委員（ジャッジメント）第１７７支部。
白井黒子は溜息をついていた。
「全く、誰が何の目的でこんな事をするんですの？」

今、白井の目の前には書類の山が置かれていた。全てこの学園都市におけるとある製品の被害届なのだが搬送中のトラックを襲ったかと思えばその製品を扱っているというだけで襲撃されると言うケースも多発している
「はあ、全く見当が付きませんわ。こんな悪質極まりない事件なんて」
あの墜落事件以後、学園都市に昆虫のような生命体『ワーム』が徘徊を始めている。当時の人間の力では同等の立ち振る舞いをするのにかなり苦労したが、今はライダーシステムが開発され、ある程度相手が出来るまでになった。
「白井さん！第１９学区でワームの反応が出ました！現場に急行してください！」
白井の背後から声が聞こえる自分の後輩である初春の声だ。彼女は特殊な何かは持たないもののサポートメンで大いに活躍している
「分かりましたの！」
白井はその華奢な体に不釣合いな剣を持って第十九学区を目指しながら飛ぶ。こうして白井は偶にワームを討伐することがあった。世界を巻き込んだ戦争も終わり生徒の関心は一端覧祭に向けられている。白井の先輩である美琴は連日上条を連れ回している。白井は帰って来た美琴の惚気話をかなり聞かされており、先程の事件の事もあり、かなり疲れている状態だった
十九学区に到着するとそこに緑色の怪物が何体か蠢いていた。ワームと呼ばれる生物の第一形態、通称サナギ体。白井は剣をへんな方向に構え手を虚空へ突き出すと
『ＳＴＡＮＤ　ＢＹ』
地面から蠍のような小型の機械、サソードゼクターが現れ白井の手に収まると白井は剣にサソードゼクターを填め、音声化されたコードを入力する
「変身」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』

白井の体がコードの様なものと機械で覆われた駆動鎧（パワードアーマー）に包まれる。
白井はサソードゼクターの尻尾を倒した
『ＣＡＳＴ　ＯＦ』
白井の体を覆っていた機械が全て弾き飛びワームに当たった
『ＣＨＡＮＧＥ　ＳＣＯＲＰＩＯＮ』
紫色の蠍のような外見となった白井は剣を構えなおし上を見る。
上には初春特製の特殊カメラが飛行をしている。それを確認すると白井はワームの群れに突撃をする。あっという間に全てのワームを駆逐して白井が帰ろうとした時、近くから爆発が聞こえた。白井がそれを確認するとどうも近くのアクセサリー店が襲われたらしい。そして白井は腰に巻かれているベルトの脇のスイッチを入れる。
『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』
周囲の動きが止まり、景色も若干明るくなる。実際は文字通り目にも留まらぬ速さで活動する為の装置でワームの特殊能力に対抗する為にあるのだが……
白井の目の前には赤く、カブトムシのようなライダーが立っていた。通称はカブト。ゼクターを開発したＺＥＣＴ（ゼクト）に反旗を翻したライダーとして重要人物とされるライダー
「この一連の騒動は貴方のものでしたのね」
白井の声にカブトは答えず、その場に立ち尽くして白井を見ている
「参りましたね。では早速、」
白井は剣を構え
「捕獲させていただきますの！」
思いっきり前へ駆け出すが、カブトは動じない。白井が勝利を確信し剣を振り下ろすと、片手で剣を受け止め白井を回し蹴りで蹴り飛ばすとカブトは何処かへと去っていった
『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』
周囲の全てが元の速さに戻り白井の変身が解除される。白井も幾つものワームを葬りさってきた。が、何回勝負を挑んでも『絶対』に勝てないのだ。力の格というか質が違うのだ

「一体、誰、何です……の？」
白井の意識は初春に携帯で連絡をしようと電話をかけたところで途絶えた

上条当麻は現在戦争から帰宅して出会い頭に頭蓋骨を噛み砕かれそうになった居候の餌（しょくじ）の材料を買いにいく最中なのだがここまでで色々あった。美琴にいきなり飛びつかれた挙句大泣きされ、毎日夜まで連れまわされる毎日。帰るたびにインデックスに噛まれもう散々な毎日なのだ。浜面や一方通行はそれなりに楽しい生活をしてるそうなのだが、上条は真逆の不幸まっしぐらなのだ。
「不幸だ」
いつもの口癖を呟き今晩のおかずを考えていた時だった。赤いカブトムシ型のメカ、カブトゼクターが上条の視界に入り上条はカブトゼクターに導かれて地下駐車場にやってきた。そこにいたのは成体のワームが一匹とサナギ体のワームが３匹だった。上条はカブトゼクターを手に取り、腰のベルトに装着した
『ＨＥＮＳＨＩＮ』
上条は早速カブトゼクターの角を４５。に傾けると上条を覆っているカブトムシのような鎧の繋ぎ目が割れた
「キャストオフ」
上条が角を１８０。向きを変えると
『ＣＡＳＴ　ＯＦ』
上条を覆っている鎧が全て吹き飛び上条の姿がカブトムシのようなライダーに変わり、倒れている角が上条の顔にセットされると
『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』
上条はワームを斧であっという間に倒していった。そして成体の姿が虚空へと消える。上条は別に慌てたりせずに腰のボタンを押した
『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』
ワームの姿が見えるようになり、上条は斧の刃の方を持ち、持ち手

のところを引っ張るとクナイのような刃が姿を現した。ワーム相手に上条が得物を使う事はあまり無いが今はなるべくはないほうが良い。上条はワームを斬りつけて圧倒していく。ワームが弱り、逃走の可能性がなくなった時だった。上条がカブトゼクターの足を押した

『ＯＮＥ、ＴＷＯ、ＴＨＲＥＥ』

上条がカブトゼクターの角の位置を元に戻すと、

「ライダー、キック」

角を再び逆の位置に戻した

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

その音声と共に上条の体に電流が流れてワームを蹴り飛ばすとワームは爆散した。上条は変身を解除するとそのまま買い物に戻った。

これが上条当麻の日常。二年前のあの日、あの少女を出逢った時から変わってしまった日常だ

第二話「まさかの転校生」

上条は今、目の前で起こっている光景から逃げたいと心底思った。
何故なら……
「今日からここにいる事になった。一方通行(アクセラレータ)だ。」
「皆さ～ん！一方(アクセラ)ちゃんと仲良くしてくださいね～！」
学園都市最強の超能力者(レベルファイブ)の一方通行が上条のクラスに転入してきたのだ
「よォ、三下ァ。愉快な死体(オブジェ)にしてやろうか？」
そして座った席は上条と土御門の近く。上条はいつもの口癖を心の中で叫んだのだった。一端覧祭も近くなり、転入生とは珍しいと思っていたのだがまさかそれがあの一方通行だったとは夢にも思わなかった（正確には一度そんな事もありえるんじゃないかと思ったこともあったのだが）こうして日常風景の一部にこのような光景が似合わない人物が紛れ込んでくるとなると相当怖いものを感じた。その頃、黄泉川が担当しているクラスにも転校生がやってきていた
「どうも、結標淡希です」
今この学校にはエツァリを除いた元グループのメンバーが集結していた
一端覧祭に備え今日は劇の舞台装置や小道具を作る時間なのだが、学年合同の作業で行われる。そして今ここには
『仕事』モードの土御門と
チョーカーに手をかけている一方通行(アクセラレータ)と
軍用ライトを構えている結標と
全身から汗を噴出している上条がいた
「ほう、貴方達もここを任されたのね。」
「テメェの手なんか借りねェ。俺だけで十分だ」
「そういうな。俺達でここをやれという事だ。暗部の仕事に比べればこんなの塵程度だ。別にそんなピリピリする事無い」

「あのー。皆さん？もう少し穏やかに出来ないのでせうか？」
上条の声に全員が上条の方を見ると
「さァて、スクラップの時間だぜェ！クソ野郎がァ！」
「カミやん。ここでお別れとは寂しいぜよ」
「悪いけど、貴方には潰れてもらうわ」
結標はライトを振るが上条は動かない。軽くしたうちをするとライトでボコボコにされ、スイッチを入れた一方通行による風の塊に襲撃され土御門に何故か殴られた。上条は北極海に落ちて、学園都市に帰ってきて直ぐに能力者との戦闘に勝ってみせ、尚且つ平気だったと言う脅威の体力の持ち主だが流石にこれは駄目だった。上条は立ち上がる事すら出来ない体で（あの攻撃の中で生きていたのが不幸中の幸いだった）ボロボロになりながら作業をして途中で力尽きた
「そンじゃ、続きをするかァ？」
「望む所よ！」
土御門は魂の抜けた上条の体を背負い上げ被害が届かず、尚且つ人目に付きにくそうな所に置くとそのまま放置してあの剣幕を止める為に帰っていった。その後、遇にも上条を発見した中学生に見えない中学生に上条は持ち去られ、土御門が帰ってくる頃には既にいなかったと言う
「まあ、カミやんだから生きて帰ってくるだろうにゃー。回収したのがカミやんの彼女になってくれればすべては丸く収まるからこのままで良いぜよ」
若干放任主義的な発言を土御門は吐くと学校の方に戻っていった。
勿論、上条のことは途中で持ってかれた。と説明し、きっと帰ってくるから信じてくれと残していったと嘘を吐いて事なき事を得た。
流石は天邪鬼（ウソツキ）と言わざるを得ない情景だった。

放課後、結局上条は帰ってこなかった。それどころかありとあらゆる通信手段も通じない。
「おっかしいわね～あの馬鹿また携帯壊したとかじゃないわよね？」

美琴もまたこの異変に気付いた人間の一人でさっきから電話をかけているのだが一向に通じない。上条捜索を行う為に風紀委員にいる後輩にかけた
「もしもし。黒子？今何処にいるの？ちょっと頼めるかしら？」
『お姉様！お姉様のご要求とあらば何でも行いましょう！』
「えっと、短く言えばあの馬鹿が誘拐された。」
『あ～あの類人猿ならさっき『シャドウ』の本部を通った時に眠ったような状態で運ばれてましたわよ」
「オーケー。じゃあね」
美琴はそのまま携帯を切ると『シャドウ』の本部を目指す。白井の話を聞けば誰が犯人なのかは十分理解できる
食蜂操祈。美琴と同じレベルで序列は五位。所持する能力を考えれば上条を手に入れようと思うのも無理は無い。何故なら上条を操れれば学園都市を悠々と潰せる可能性もある。それに、彼女が何を考えているのか理解できないからだ。
「待ってなさい。私がアンタ達の野望をぶち壊しにしてあげるから！」
彼女は心の中で何度も呟く。コレは決して上条を独占できる事から来る嫉妬ではなく個人的な治安維持活動なのだと

「さーてと。これをどう調理したら面白くなると思う？」
学園都市の超能力者（レベルファイブ）第五位の心理掌握（メンタルアウト）を有する少女、食蜂操祈は悩んでいた。上条とは美琴とは別の方面で仲が良いのだ。因みに彼女がワームストーンを全て破壊することを指示していたりする
「あなたはどうして欲しいのですか？とミサカは問いかけます」
妹達（シスターズ）の検体番号（シリアルナンバー）１０９７６号は尋ねる。実際上条をここまで持ってきたのは彼女で上条の治療も担当した
「決まってるじゃない。私の最終目的は食蜂の苗字を捨てて上条操祈になる事よ。第三位は意地張っちゃって全然近づけてないみたいだしぃ。私が上条先輩を先に落とせばいいのよ。幸い能力が通じな

いけど、私はちょっとだけ知ってるのよ。上条先輩が喜ぶとされる事を。あのでこが広い人に感謝しとかないと」
現在彼女は常盤台の制服でもなければ仕事用の服でもなく、上条の高校に潜入する為の服。つまり上条の高校の制服を着ている。実際の所最近の上条の搬送先はあの病院ではなくこの部屋である。現在上条はベットで快眠中であり自分の危機に気付いていない
「結局、この人と結婚できればいいという訳ですね。とミサカは納得します」
「そういう事」
レース入りの手袋を填めて更に考える。このまま抱き付けば一発なのだが、それだけでは駄目なのだ。上条はかなり多くの女性から好意を持たれているのは明らかで戦争から帰って来てきっと多くの人にそれをされているだろうし世界中を探せば自分と同じもしくはそれ以上のスタイルを持ち上条に好意を持っている女性がいても不思議ではない。だったら、一端覧祭の時に美琴より早く上条を誘えば良い話なのだ。突然、部屋のドアがかなりの勢いで開けられ、妹達の一人が息を切らしながらこう告げた
「大変です！最終兵器（オリジナル）が侵攻しています！ロシア軍を沈めてみせた御姉様（オリジナル）相手にどう対応しますか？とミサカは問いかけます」
「決まってるじゃない。こっから逃げれば一発だし。最悪寮で私専用抱き枕になってもらえば万事解決。時間を稼いで」
「分かりました。ミサカネットワークに今の指示を流しました。頑張れる限りやってみるとの事です」
直後、上条の目が覚めた。上条は髪を掻き毟りながら、
「ん？何で俺いつもの部屋にいるんだ？」
「上条先輩！」
食蜂は上条の手を掴むと
「一緒に逃げましょう！今ここに鬼神が迫ってます！」
「良くわかんねえけど、仕方ねえな。よし！逃げるぞ！」
上条の手を引っ張って部屋の外に出た時だった

「見〜つけた。攫われた馬鹿と攫った馬鹿を見つけたわよ。そして今度は仲良く駆け落ちですか。全く、」
その少女、御坂美琴はバチバチと前髪に紫電を走らせると
「一回、その腐った根性ごと全部忘れろやゴルァ！」
雷撃の槍を上条達に向けて打ち出すが上条はかなりの速度で後退しながら右手で打ち消していく。何回も放たれる雷撃の槍を放つが勿論打ち消され、窓ガラスを割り２人とも飛び降り下に待機していた妹達に受け止められ、上条の手を引いて逃げていた時だった
「ちょっと、待っててくださいね。」
今、食蜂たちの目の前にいるのはワームだった。以前、上条が退治した群れと同じ規模の奴だ。食峰が手を虚空へ出すと蜂のような小型装置、ザビーゼクターが手に収まった。そして食蜂は腕に巻いている腕輪にザビーゼクターを装着した
「変身」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』
直後、食蜂の姿が蜂の巣のような鎧を纏った状態に変わった。そして食峰がザビーゼクターの羽を開き、ザビーゼクターを１８０。回転させた
「キャストオフ」
『ＣＡＳＴ　ＯＦ』
食蜂の姿がその音声と共に重々しい部分が一気に吹き飛び蜂のような姿に変わった
『ＣＨＡＮＧＥ　ＷＡＳＰ』
食蜂は素手のみで周囲にいたさなぎ体を全て倒すと成体を蹴り飛ばしてザビーゼクターのボタンを押した
「ライダースティング」
『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』
よろけて逃げようとしたワームに飛び掛り、ザビーゼクターを突き刺すとワームは大破した。そして変身を解除すると上条に笑いかけ
「さあ上条先輩。一緒に逃げましょう。もう邪魔者はいませんから

！」

食蜂はそのまま上条の左手を引っ張って走り出すのだった。向かう先は上条の寮。上条はどこからか不幸だ程度じゃ済ませられない事が起こりそうなことをこの時既に直感していた

第三話「禁断の知識」

上条を連れて食蜂は上条の寮の部屋のドアを開けると、そこで銀髪のシスターが構えており飛び掛ったかと思えば食蜂を擦り抜け、上条の頭に噛み付いていた

「ぎゃあ！何すんだよインデックス！」

「何すんだよ！じゃないよ！この前帰って来たばっかだってのに性懲りも無く女の子を連れ込んで！この馬鹿とうま！暫く空腹のまま放置されてた私の恨みをこの頭蓋骨に刻み付けてやるんだよ！」

暫くしてインデックスに昼食（カップメン）を作り、食べさせると上条は溜息を付いて頭を？いた

「はあ、不幸だ」

「そういえばインデックスさん。今の所残りは幾つ何ですか？」

食蜂の質問に対しインデックスは空になったカップ麺のカップをテーブルの上に置くと、一息ついて

「うんとね、確かこの前の時から考えるともう数える位しかないかも出荷もとの工場も残り３つで取扱店は１０個これはもうとうまがちょっと頑張るだけでいいかも。それとあの子に協力してもらう必要性があるんだよ。とうま、伝えてくれる？」

上条は生返事で返すとポケットから携帯電話を取り出して電話をかけた。電話の相手は上条達の協力者だ

「ああそっちは大丈夫か？」

『はい、今話し合いの途中だったんですけど席を外させてもらってます。用件は何でしょう？』

聞こえてきたのは少女の声。上条達へ学園都市の『表』の動向を探って貰っている。上条が以前ワームとの戦闘の際に出会い、今こうして協力してもらっている

「俺の仲間からの伝言。もう少しでワームストーンの供給は全部収まるってさ」

『……そうですか』
その電話の電話の少女の声には何処か寂しげな感じが乗せられていた
「何か悪い事思い出させちまったか？」
『あ、いえいえ。もう過ぎた事を言っても遅いですよ。アレは仕方がないことだったんですから！あたし達はあたし達にできる事をしましょう！』
少女の声には活発さが溢れているが無理矢理出している感が染み出ていた。上条は思うもう少し早くこの『異常』に気付けていたら彼女だってこの活動に付き合うことは無かっただろう、と
「そうか、じゃあな」
『はい！』
上条は携帯を閉じてポケットにしまった。食蜂はというとインデックスの頭に手を当てていた
「いきなり何するんだよ！」
「ちょっと知りたい事があってねぇ。今後の為になるのかなぁって思ったんだけど……ッ！？」
刹那、食蜂の体が後ろに吹き飛ばされて特に刃物は刺していないのに所々出血している。それに血まで吐いていた
「大丈夫か？」
「一体……何？知識を除いたら……何でこうなったの……？」
蜘蛛の巣のようなレースの付いた手袋が血に濡れている。上条は急いで応急手当を行った。何とか一命は取留めて上条は胸を撫で下ろすような気分になった
「とうま、多分私の中の『原典』を見ちゃったんだよ。この人」
上条もそこまでの推測は出来た。似ているのだ土御門が魔術を使った時や闇咲がインデックスの『原典』を見た時と上条はそのまま壁に激突した衝撃で気絶している食蜂の傍らに腰掛けた
佐天涙子は少し思い詰めていた。彼女の友達はワームの擬態を見抜

くという石、ワームストーンのアクセサリーを身につけて生活していた。彼女も付けるか？と問われたが彼女は一切付けなかった美琴や白井のように能力も無い。ただあるのはメイクアップアーティストとしての才能しかないような彼女が付けないのは周囲は疑問を抱いたが彼女は普段通りに生活していただがある日、事件は起こった。彼女の親友の一人が集合をかけて佐天がそこへ向かうと……

「ねえ、涙子もこのペンダント付けてみなよ。私、能力者になれたんだよ」

親友の一人が異形の姿に変わり、残りの２人も異形に変わる。そして一斉に言った

「「「「貴方も私達（ワーム）の仲間になりましょう」」」」

佐天はそこから逃げ出したが既にそこに親友だった異形が立っていた。佐天は逃げるがあっという間に追い込まれてしまった

「ほら、私達と同じになればこんな風にもなれるのよ？」

佐天は震える手で持っていた学生鞄に手を伸ばす。そして銃のグリップのようなものを取り出して上に掲げると蜻蛉の形のメカ、ドレイクゼクターがそこに止まった

「変身」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

佐天の姿がヤゴに潜水用の装備を取り付けたような鎧の姿に変わり、ドレイクゼクターの尻尾を引っ張った。すると鎧の重々しい部分が繋ぎ目の部分で分れ、外れる寸前となった。そして彼女は言った。一つの単語を

「キャストオフ」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

佐天の鎧が吹き飛び、周囲の異形が吹き飛ばされる。今の彼女の姿は蜻蛉のような青いライダーに変わっていた

『ＣＨＡＮＧＥ　ＤＲＡＧＯＮＦＬＹ』

佐天は銃となったドレイクゼクターの引鉄を引いて異形を銃弾で撃

った。だが、最後の一撃が加えられなかった
「ねえ皆、お願いだから元に戻ってよ！幸せだったあの頃に戻ってよ」
「幸せ？笑わせないでくれる？無能と決め付けられてたあの頃に戻れってのは悪いけど。お断りさせてもらうわ」
異形の姿が虚空へと消える。それに次いで佐天も腰のスイッチを入れた
『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』
周囲の物の動きが止まり、異形の姿が全部見える。佐天は銃で牽制で一箇所に纏める。そして覚悟を決めてドレイクゼクターの羽をたたみ、胴体にセットして尻尾を引っ張った
「皆、ごめんね。救ってあげられなくて」
『ＲＩＤＥＲ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ』
佐天は銃を構えると引鉄を引いた。そこから放たれたのは青い玉でバレーボールくらいの大きさあったが、弾速は遅かった。そして何回も引鉄を引いて青い玉を計３つ作り出して異形に当てると異形は跡形も無く大破した。
『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』
止まっていたものの動きが止まり、ドレイクゼクターも何処かに飛んでいった。佐天はグリップを握り締めてその場に泣き崩れた。今まで何対ものワームを仕留めてきた彼女だがここまで躊躇った事は無い。絶望に暮れていた佐天に手が差し伸べられていた
「放っておいてください」
「いや、君みたいな子が泣いているのを放っておく方がおかしいと思うぞ。大丈夫だ。さっきのを見ていたけど、アレはＺＥＣＴが隠している『裏』の一部だ。ワームを増やす為の」
佐天は驚愕の居に呑まれた。確かに考えてみれば変な話だ身に着けているとワーム化するような商品を販売しているのにＺＥＣＴは一切そういう発表をしていない。それに発売されたのもつい先月の事。明らかにおかしな点が多すぎるのだ

「だったら、どうすればいいですか？」
佐天が涙を拭いながら尋ねたそして少年は答える
「ぶち殺してやろうぜ。ＺＥＣＴが抱いているふざけた幻想を」

これが佐天が上条達と協力している０９３０事件後の、きっかけとなった出来事。いまでも鮮明に覚えている。だけど、彼女が行いたいのはＺＥＣＴへの復讐ではない。ましてや上条達はそんな事で動く人間ではない。彼等が行いたいのは、何も知らずにワームになっていく学生を守り抜くと言う事だ。だから彼女は今呟く。彼女に残った唯一の友の名を
「……初春……」
それは彼女が決意を新たにした瞬間であった

第四話「戦いの女神」

御坂美琴と上条は二年前からの付き合いだ。最初の瓦礫の下から2人とも生還し、お互い友達が少ないという境遇が似ているということで馬が合いそれからも何度も一緒に出かけたりした。絶対能力進化(レベルシック)計画(スシフト)の時に助けられてから美琴は更に上条に惹かれていった。そして第三次世界大戦の時、上条の記憶喪失を知り、上条への好意を肯定し上条を助けに行ったが上条はまだやるべき事がある。と言いそれを断り、暫く行方不明になった。その間、街中を魂の抜け殻のように彷徨い、何度も自殺を図ったが、白井が全てを阻止して美琴は今こうして生きている。上条と再開した日は寮に帰れなかった。その後も毎日連れまわし幸せの渦中にいる。ただし……

「見つけたわよ。」

こうしてワームが無関係な人間を襲っていると言う点を除いては。美琴はクワガタ形のメカ、ガタックゼクターを召還すると腰のベルトに装着した

「変身」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

美琴の姿がクワガタのサナギのような姿に変わった。美琴は肩のマシンガンを構え、引鉄を引くと周囲のワームを一掃して変身を解除した。無造作にポケットの中からメダルに埋もれた写真を取り出す。その写真にはカブトとドレイクが映っていた。

「こいつ等、私がこの手でぶちのめしてやるわよ。アンタ達のせいでどれだけの人が困ってると思ってんのよ」

ポケットに写真を戻すと美琴は歩き出した。とある少年と何処かで逃避行中の少女を探す為に。あの後、上条の携帯にかけようと思ったが上条の携帯は跡形も無く大破しており、美琴はそれすらも忘れて連れまわしていた為断念し上条の寮の場所を調べて行った際にはインデックスがテレビを見ており、『残念でしたぁ。貴方に私を捕

まえるなんて不可能だよ～』と書置きが置かれ、現在進行形で逃げているのだ。しかもその少年は彼女の想い人であり、その今逃げている少女からも好意を持たれている。それだけではない。この少年には一万人近い位の人間から好意を持たれているのだ。競争率が高いとかそういう話ではない。この少年を射止めたくばこの少年を惚れさせる必要性があるのだ。その少年、上条当麻に嫌われれば即座に失敗（ゲームオーバー）なのだ。最高難易度の恋愛ゲームを攻略本無しでグッドエンドを迎えるように頑張るようなものだが、その逃げている少女は自分より派手に仕掛けるかもしれない。最悪、彼女に持っていかれて……

美琴はそんな終わり方にならないように上条を探しに出かけた。

上条は現在、食蜂と共に街中を闊歩していた。今手を繋いでいる少女は中学生だが体のラインがどう考えても中学生に見えない。所々に包帯を巻いている事を除けば百人が百人振り返るだろう。上条は先ほど後ろから嫉妬に溺れた友人ＴとＡに奇襲されたばかりであり背中が少し痛む

「大丈夫ですか？さっきのあの攻撃力では結構痛むと思いますが？」

「大丈夫だ。まだちょっと痛む程度だから。我慢できるぞ」

「そうですかぁ」

食蜂は少し考えると上条に腕を絡ませてきた。上条が幾ら朴念仁とは言えこのようなイベントには弱い。それにいつかの罰ゲームのときに御坂妹も同じ事をしたがその時とこの時とでは腕に当たっている感触に違いがありすぎる。この状態を見た友人は確実に殺しに掛かると思う。美琴やインデックスと同じくらいでありながら上条が好むような少女で上条はこの少女にはかなり好意的だった。今こうして上条は後少しでこの少女を好きになってしまう状態なのだ

「あの、上条先輩。私となら一生歩んで行けますか？」

今の発言に上条の心臓がドクンとなり、頷きかけた所で雷撃の槍が

２人の視界を遮った
「やっと見つけた……今度こそ絶対にアンタを連れ戻してみせる。」
そこに立っていたのは息を切らした美琴だった。上条はさっきまでの空間から一気に引き戻された。そして現実の光景を少し見ていたら、腕の感覚が消えた。食蜂はザビーゼクターを召還し美琴に声をかけた
「へえ、随分と荒っぽいわねぇ。上条先輩に嫌われても知らないわよ？後少しで私のものになる所だったのに」
「アンタの事情なんか知らないわよ。私はアイツを取り返しに来ただけ。二度とこの手から離れていかないようにね」
美琴はガタックゼクターを構えてそう食蜂に言った
「それじゃ、上条先輩争奪戦の開幕って所かしらねぇ。私の戦闘力に貴女は何処まで着いてこれるかしら？」
美琴はその問いかけに答えず、ガタックゼクターを構え食蜂もザビーゼクターを構えていた
「「変身」」
『『ＨＥＮＳＨＩＮ』』
それぞれ変身をして、美琴はガタックゼクターの顎を開く。食蜂も羽を上へ上げてお互いの重い鎧の繋ぎ目が開く
「「キャストオフ」」
食蜂はザビーゼクターを１８０。回転させ、美琴もガタックゼクターの顎を最大まで開いた
『『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』』
お互いの鎧の部分が吹き飛び、美琴は青く、鍬形のような姿に変わった。そして頭の脇に付いていたクワガタの顎のような角が頭に装着された
『ＣＨＡＮＧＥ　ＷＡＳＰ』
『ＣＨＡＮＧＥ　ＳＴＡＧ　ＢＥＥＴＬＥ』
美琴と食蜂はたった一人の少年の為に戦いを始めた。美琴の拳を避けて食蜂は美琴に拳をぶつけるが美琴はギリギリで避けて蹴りを放

つ。食蜂の体がよろめき、美琴は更に拳を放とうとするが食蜂は体制を変えて美琴の重心を自分の手で操り、美琴の重心を崩す。美琴が躓いた所で食蜂の拳が放たれなかった。美琴が食峰の方を見ると食蜂は上条が居た方向を見ていた。美琴も食蜂の見ている方向を見ると、そこにいたはずの上条がいない。美琴と食蜂は変身を解除して上条を探しに駆け出した。

時は少し遡り二人がキャストオフを行った後、上条の背中をカブトゼクターが突き、上条はカブトゼクターに導かれ、ワームの元に辿り付くと上条は変身しキャストオフして殴りかかった。上条が一呼吸終える頃には成体が一匹残るのみとなった。成体は恐れをなして逃げ出そうと超高速移動（クロックアップ）を行うが上条も腰のボタンを押してワームと同等の速度に追いつくと上条はワームを蹴り飛ばして近くのコンクリが砕けるコンクリは空中に静止したままであり、上条はカブトゼクターのボタンを押した

『ＯＮＥ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ』

「ライダー、キック」

上条は一度戻したカブトゼクターの角を一気に返した

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

上条が放った上段蹴りがワームを捕らえ、ワームは跡形も無く大破した。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

周囲の砕けたコンクリが全て一気に落下し、周囲が微弱ながらも揺れた。上条は変身を解除した途端、右手を掴まれ、引っ張られ、柔らかい何かに顔を埋めた。

「上条先輩♪私と最後まで付き合ってもらいますからね♪」

その一言で御坂（ビリビリ）美琴から逃げろパート2が幕を開けた。上条は彼女とならどこまでも付いていっても良いような気がした。

遥か彼方で嫉妬に包まれた鬼神が上条を探してるとは知らずに……

第五話「とある乙女の上条攻略」

上条の教室では一方通行と土御門の視線がとある場所に向けられている。そこは空席で、数日前元『グループ』の構成員がズタボロにした挙句、適当に被害が及ばないような場所に置いておいたら、誰かに持ってかれ、土御門が現在必死に探している。今こうして学校に居るのも上条が来ているかどうかを確認する為だ

（カミやんの右手はある意味魔術の世界じゃ無敵だし、右手首から後ろ……例えば記憶操作を受けると右手で触れない限りカミやんは最悪、対魔術使用殺戮兵器になってしまいかねないな。アレイスターなら訊けば直ぐに答えるだろうが、あいつの事だプランが～とか言って教えてくれるとも限らないしな……それに、常盤台の御坂美琴（エー）と食蜂操祈（じょうおう）がカミやんが消えた日と同じ日に失踪したとか聞いたな……何か関係があるのか？）

一方通行は数日前、上条にした仕打ちに対し大いに反省していた。勿論、作業を終えてから殺し合いを始めたのだが、開始直後に黄泉川に止められ、寮に帰れば打ち止めと番外個体とインデックスとが遊んでおり打ち止めにやや無理矢理気味に上条捜索を言い渡された

「いい！？ミサカ達の恩人を助けるんだよ！ってミサカはミサカは無理矢理気味に押し付けてみたり！」

「アヒャヒャ。ちびっ子に手懐けられてる第一位って無様だねえ。」

「とうまとみさきが逃げてる事は確かなんだよ。早くしないととうまがみさきと一緒に駆け落ちしかねないんだよ！」

三者三様の言い分を聞かせられ、インデックスが前に探していた人物はトウマという人物でどんな人物なのだろうかと思っていたのだが、打ち止めのミサカ達の恩人。それで分った。上条であると。

（三下ァ……後で死体（スクラップ）にしてやるぜェ。肉片も残さずになァ！）

一方通行が探す人物の内、ミサキなる人物は誰なのだろうかと一方通行は頭の隅っこで考えていた

上条と食蜂は現在、鬼神(みこと)から逃走中なので、基本は路上生活をしている。ホテルに行くと色々と酷い目にあい、
この日、上条当麻は死んだ
と言う事になりかねないので上条が自主的に断っていた。もしも上条が一人ならば友人の家を渡り歩くのだが、この少女がいては確実に殺されるだろう。
「どうしますぅ？」
「さあな、御坂から逃げるのが今の最優先だ。お前と逸れたらお前の身も危ない」
「そんなに私って魅力的ですか？そんなに一緒にいたいと思うんですかぁ？」
ここが上条美琴(みことルート)と上条操祈(しょくほうルート)の分かれ道なのだが、上条は絶対に気付かない。この朴念仁にそんな人生の分かれ道を選択しろなど五歳児に高校を何処に行かせるかを決めさせるようなものだ。上条はこの時、不幸がなせる業なのかとった行動がとんでもない悲劇を生む事になってしまった
「危ない！」
食蜂を抱えて上条が床に伏せるとそこを雷撃の槍が通り過ぎた。その雷撃の槍の主、御坂美琴はいかにも不満そうな表情をしており、食蜂にいたっては顔を真っ赤に染め、
「か、か、上条先輩、ま、まだ早い、です。私達、まだそこまで、いってないのに……」
この状態の食蜂を抱えている状態では逃げる所か動く事すらままならない。
「ほほう、そこまでしてその愛しの彼女を護りたいと。随分と偉くなったわね」
「おい御坂！いきなり電撃は酷いだろ！コイツは俺と違ってか弱いの女の子なんだぞ！」

今の台詞でこの巨乳中学生の思考回路は完全にショート。上条に糸が切れた人形のように倒れこみ、上条がそれを受け止めた。美琴にはそれが抱き合ったように見えたらしく、
「2人とも全部忘れろやゴルァ！」
美琴は激怒し、全力の雷撃の槍を冗談抜きで撃ってきた食蜂を左手で抑え、右手で防ぐ。右手で防いだと思ったらそこには磁力を応用した移動方で上条に近付いた美琴が居た。美琴は拳を構え、上条に殴りかかったが、バランスが崩れ上条の胸の中に直行した。
「ふにゃあああああああああああああ！！！！！」
この日、この周辺では一時的に停電があったという。

両手に花とはまさにこういうのではないかと上条は思う。現在、路地裏で上条は動けなかった。上条の左手には気絶したままの食蜂が、上条の右手には漏電＆気絶中の美琴が居た。勿論漏電は上条の右手で抑えられているものの、今ここを、特に白井や土御門に見られたら最期、本当に
この日、上条当麻は死んだ
となってしまうので絶対に見つかりたくない。
「ん？あ上条先輩！」
目が覚めた食蜂が左手から抜け出し、上条に飛びついた。上条はこれで左手が自由になったと歓喜し、目の前の幸せイベントには興味が無かった。食蜂は美琴を見るなり、
「上条先輩。これはチャンスですよぉ。一気に差が開きますからぁ」
「じゃあ、ちょっと離してみるぞ」
上条が右手を離すと美琴が漏電を再開し、即座に右手で触れて食蜂に届く前に右手で触れて打ち消す。仮にクロックアップを使えば多少はましだが上条が美琴を右手で触れながらというのは絶対に不可能だ
「問題です。このただいま絶賛漏電中の御坂さんから電撃よりも速く逃げる方法はあるでしょうか！」

「はい！ありません！」
「正解です！」
上条と食蜂は結局美琴を抱えたまま移動する事になった。上条の隣にいる食蜂が美琴を恨めしそうに睨んでいる。美琴は仕方なく抱かかえられているが、何故それに嫉妬の炎を燃やしているのか上条には理解できなかった
「う……ん？」
次の瞬間、腕の中の電撃姫が目を覚ました。電撃姫は目を開けて上条をみるなり
「なななな何でアンタが！は、離しなさい！」
上条の腕の中で顔を真っ赤にしてバタバタ暴れ始めた。が、即座に止まり、少し考え込んだ
（ん？ちょっと待ちなさい。この状況は流石の女王サマも経験してないわけであって、私がここで思いっきり甘えてみればコイツが私に興味を持つわけで……！）
答えは出た。ここで思いっきり媚キャラを演じてみる。勝負は多分数分。美琴は上条の首に両腕を回すと耳元で
「ありがとう、『当麻』。」
礼儀正しく振舞っている食蜂には到底出来ないであろう芸当を披露し上条の顔に頬ずりをやった
「み、御坂！？」
「美琴って呼んでみ・こ・と」
美琴の行動により上条の脳内は大混乱になっていった
「大変です！現在脳内の殆どがショートを始めています！と脳内ミサカは報告します」
「あーあ。もう駄目だねコレ。一回電源落とすよーってミサカは実行に移すよ」
何故か脳内に居た妹達（シスターズ）の一人が上条の脳の電源を落とし、上条はそのまま地面に倒れこむ。北極海に落ちても平気なので勿論傷一つ無い。肉体的には。精神面では大ダメージ。美琴はこのキャラを演じ

て見れば上条と籍を入れて上条美琴に慣れるかもしれないと思った美琴であった。この時までは幸福な時間であった。この時までは

数日後、彼女は絶対に知りたくなかった現実に直面する事になる

第六話「裏切り者を探せ」

上条が目を覚ますと、食蜂に膝枕されいていた。
「あ、目が覚めましたか。御坂さんはツインテールの後輩に連れられて帰っちゃいましたぁ」
「ああ、そうか」
上条は起き上がり周囲を見渡す。日が陰っていた。食蜂は上条の片腕に抱きついたままで一向に離れない。上条が寮まで送っていくかと問えばずっと一緒にいたいと頑なに拒んだ。上条と食蜂は仕方なくこの状態で街を歩く事にした。上条は今、かなり幸せだった

白井、初春、佐天、美琴の四人はファミレスの一角で地図を広げていた。そして白井が×マークを付けていった。一通り付け終えると、
「これらが今までにカブトと思われる人物に襲撃を受けた箇所ですの。わたくし達の警備に行き届いていない時に、全てそうですの。わたくしはあまり言いたくないのですが、この中に誰かに情報を流している可能性がありますの。ここまで偶然というのは怪しすぎるので……」
「そんな！私たちを疑うって言うんですか！白井さん酷いです！」
白井が全てを言い終える前に初春が大声をあげた
「いえ、そうとは決まったわけではありませんの。ですが、その可能性が高いと。初春、では一つ訊きますけどワーム関係の仕事を任されているのはわたくしとお姉様ですの。初春と佐天さんはそれのサポートを任されている身ですの。ですから、ワームストーンの警備情報は初春のパソコンに保存されており、その警備網を突破するのはお姉様でも不可能ですの。だから、警備情報をこうして決めている中に裏切り者がいるか、それとも誰かが初春のパソコンを秘密裏に立ち上げ警備情報を覗いているかのどちらかですの。しかし、

それは不可能ですの。つまり、警備の穴を的確に突けるのはこの中にカブト、もしくはその協力者が隠れている可能性がありますの。」
白井は心底辛そうな顔でそう言った。そして白井は続ける
「しかし、カブトが神出鬼没でその素性、動機が全て不明である以上、裏切り者がいるというのが有力ですの」
「黒子、アンタ自分で何言ってるか理解できてるの？」
「もちろんですのお姉様。カブトを止め、素性を全て話していただければ全ての事態は丸く収まるのですから。」
白井は剣道の竹刀を入れるためのケースを見る。街中でワームと遭遇した時の為に普段から携帯しているのだが、流石に裸のままで持ち歩けば確実に通報されかねないし、されなくても怪しまれる。その為にこうしているのだ。白井は言った
「いいですの。現在残っているワームストーン関係施設は、先ほどの通達によれば工場が一つ、商店が一つですの。わたくしと佐天さんは店の方を、お姉さまと初春は工場の方をお願いしますの。」
佐天はこの話を聞き、頭の中で復唱すると携帯を取り出し隣の美琴、正面の初春、その隣の白井に見えないようにメールを打ち、上条へと送った。
『最後は工場へ向かってください。残りの店はあたしが片付けます。しかし、相当強いゼクターの資格者がいるので注意してください。』
その所有者は美琴なのだが上条のことを考えてのほんのちょっとした配慮だ。佐天は携帯を鞄の中にしまい、ポケットにグリップを放り込んだ。そしてその店へ向かった。白井は周囲に大規模な能力者の戦闘があるのでという理由で周辺の人間からワームストーンを預かり、避難させ、店の中にも同じような手順を踏み、今この場に無関係者は誰一人として残っていない。白井は佐天に店の中にいる様指示を出すとそのまま待ち構えた。自分が間違った選択をしたとも知らずに
佐天は自分しかいない店内でグリップを取り出すと上に掲げた。通気口からドレイクゼクターが現れ、グリップに着地した。佐天はこ

こで全てを終わらせる為に静かに告げた
「変身」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』
佐天はドレイクゼクターの尻尾を引っ張りキャストオフをすると早速羽をたたみ、ライダーシューティングをワームストーンの商品に向けて乱射した。佐天は全てを終えると腰のスイッチに手をかけた時だった
「お待ちなさい。風紀委員（ジャッジメント）ですの。器物破損の現行犯で」
サソードゼクターを剣に装着し変身し、キャストオフを済ませると
「拘束いたしますの！」
銃と剣。間合いはこの場合は確かに銃のほうが有利だが、銃は発砲されてから当たるまでホンの少しだけタイムラグが生じる。それにリロードの際に隙が生じる。しかしこのドレイクゼクターに銃の常識は通用しないし、白井の剣にも絶対に磨り減らないという常識の通用しない点がある。白井は一気に駆け出し佐天へと距離を詰める。佐天は横に転がり距離を離して銃弾を放つ。
「貴方、そういえばカブトじゃありませんのね。強いて言えばカブトと同じ凶悪犯とでもいいましょうかね。さて、貴方、佐天さんという女の子、見かけませんでした？万が一殺してしまったのならこの場で倒しても合法的になるので、一応確認は取っておきたいのですが」
佐天は自身が今している事に一切罪悪感を感じていないはずが無かった。自分の友達を騙してこっそりと学園都市の敵に情報を流し、現に幾つもの店や工場を破壊し、ワームストーンの生産を遅らせたはずだ。そして覚悟もしていたはずだ。あの時、自分の友をこの手で殺したその時から。だが、佐天は上条や一方通行のように真っ直ぐ進めるものではない自分の思うがまま進めるはずが無い。佐天は羽を再び折りたたみチャンスを伺う。傍から見ればこの場で出来る冷静な判断だが佐天は引鉄を引けなかった
「どうしたんですの？最後の最後で怖気づきましたの？自分でここ

までのことをしておいて自分の罪の重さも理解できないようなアマちゃんでしたのね」
白井は佐天に切りかかる。佐天は体でその刃を受け止めると白井が聞き取れるかどうかさえ怪しい暗い小さな声で呟いた
「（ライダー、シューティング）」
『ＲＩＤＥＲ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ』
佐天が引鉄を決死の覚悟で弾き、白井の体を吹き飛ばす。白井は壁に叩きつけられ、床に倒れ伏した。佐天は振り返ると全速力で走り出す。白井は気絶している思い、走りながら変身を解除するが、彼女のその瞬間は白井に見られてしまったのだ。白井は薄れ行く意識の中で呟いた
「何故……なんで……すの……？佐天、さん……」
白井の意識はそこで途切れた。自分の無力さを呪いながら、自分の友達を止められず、敵に回してしまったという大失態を犯してしまうほどの無力さを呪いながら……

第六話「裏切り者を探せ」（後書き）

いよいよ第一章も大詰めになって来ましたが、白井さんがあまりにも不憫すぎるので自分で書いていてちょっと悲しいです。
現に白井さんは第一話の冒頭のみで活躍したのを最後にやらっれぱなしなので本当に何とかしないと。と思いました。まあ、白井さん＝サソード、美琴＝ガタックの設定は後々生かされるという感じなので、今は多少不憫でも気にしないで下さい

第七話「知ってしまった真実」

「黒子！」
美琴は白井が緊急搬送された病室に飛び込んで白井の現状を見る。
工場には初春が残って何かあれば美琴が駆けつけるという事になり、急いでやってきたのだ。白井の体の所々には包帯が巻かれており、ベットに腰掛けていた。その状態で白井は言った。
「お姉様、初春は…工場の方ですのね。お姉様、わたくし達の中にいた裏切り者が分りましたの」
「え？」
「佐天さんがカブトと繋がっている可能性が高いんですの。現にわたくしにここまでダメージを負わせたのも佐天さんですの。何故あの佐天さんが犯罪の片棒を担いだのか。わたくしには分りかねませんが」
白井は少し考え込むが美琴は既にこの病室にいない。佐天を探す為に慌てて出て行ったのだと白井は確信した。白井は誰もいなくなった病室で呟いた。
「はあ、佐天さん一体何処で踏み間違えたというんですの」
白井は病室の隅に立てかけてある剣に目をやりながらそう呟いた

佐天は第七学区の美琴がいつも蹴り飛ばしている自販機の裏で泣いていた
「白井ざぁん……ごめんなさい……。あたじだって好きでやってるわけじゃないんですよ……」
「だったら、その訳、教えてもらえるかしら？」
佐天は慌てて涙を拭って声のした方向を見る。そこにはジュースを持った美琴が立っていた
「御坂さん……」
「悩み事があるなら相談にのるわよ」

美琴はなるべく警戒させないように歩み寄ろうとするが、佐天が一歩踏み出したときに叫んだ
「それ以上近付かないでください！でないと、幾ら御坂さんとはいえ、撃ちます！」
グリップを握り締めて佐天はそう叫んだのだった

美琴は白井からの数少ない情報が外れである事を祈りながら佐天を探していた。普段自分が蹴り飛ばしている自販機で一休憩を入れて散策に本腰を入れようとした時だった。佐天の泣き声が微かに自販機の陰から聞こえ、近くの別の自販機でジュースを二本購入して安心させようと近付いた時だった。彼女は言った。美琴自身を拒絶する言葉を
「それ以上近付かないでください！でないと、幾ら御坂さんとはいえ、撃ちます！」
美琴の優秀な頭脳はその言葉と白井の言葉を照合して一瞬で佐天が白井をあんな状態にした犯人であると気付いてしまった。それに、佐天の手には銃のグリップだけを取り外したような物が握られていた
「何冗談言って……」
美琴にとってはこれが何かの冗談であると信じたかった。彼女の親友でテレスティーナとの決戦の時に勝機を見出せたのは彼女のおかげだし、何より、彼女と美琴は数少ない心中を吐露できる友人に過ぎない。普通の女子中学生みたいに笑って、仲良く友達と過ごして、最後の受験は精一杯頑張って、最後に受かって大きく笑う。そんな当たり前の女子中学生だったはずだ。決して犯罪の片棒を担ぐような人間ではない
「もういいです。せいぜい痛みも感じないように死ねるように努力してくださいね」
その佐天はもう佐天には見えなかった。日常というフィルターが掛かって見えなかったが、彼女は確実に変っている。美琴から見れば

悪の方向へと。佐天は即座にドレイクゼクターを呼び、変身すると美琴に向けて何の躊躇いも無く発砲を始めた。美琴は周囲にあったマンホールやら何やらで盾を作って銃弾を防いで佐天に語りかける
「佐天さん、もう良いんだよ。貴女一人で抱え込む必要は無いんだから、私たちに相談すれ……」
美琴の言葉は彼女に届かず、彼女は美琴の言葉を始めて否定した
「うるさい！うるさい！うるさい！貴女に何が分かるって言うんですか！何も知らない常盤台のお嬢様にあたし達の一体何が分かるって言うんですか！貴女は、自分の手で大切な人を殺さなきゃいけない気持ちなんか分かるわけが無い！」
（駄目だわ……錯乱状態に陥ってる…荒っぽい手はなるべく使いたくなかったけど、やらないと私が死んじゃうわね…。少し弱らせて確保するのがベストだけど、手加減って面倒ね本当に）
美琴はこの状況で自分が死んでは元も子もないと判断して佐天と同等の力を使う為にガタックゼクターを召還して変身し、佐天の銃に双肩のマシンガンで対応する。両者共に実力は互角で一切の埒が明かない
「佐天さん、お願いだから。もうこんな事は止めて！」
カブトに加担している佐天を連れ戻すべく美琴は説得を試みたが、それを遮るように通信が入った
『御坂さん！大変です！工場が…工場がカブトに潰されました！』
初春の突然の通信で美琴は驚愕の一食に染まった
「え？」
『さっき、カブトの襲撃に遭って…私には目もくれなかったんですけど、あっという間に潰していきました。今は逃走していているので、万が一相対した場合には撃破して変身者を確保してください。』
「面倒な事になったわね……」
「その様子だと、こっちの作戦を成功したみたいですね。だから、もう」
『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

『ＣＨＡＮＧＥ　ＤＲＡＧＯＮＦＬＹ』
「終わりにしちゃいましょうか。もういいですから、貴方は充分頑張りました。さようなら」
佐天の銃の撃つ速度は増していく、美琴の意識は最後の工場まで破壊されたと言う事実の所にあって、佐天の銃撃までにはいっていなかった。佐天の銃撃に対し無防備であった為に近くの小さい雑木林に放り出された。
『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』
雑木林に投げ込まれたのと同時に美琴はとある人物を目撃した
「……カブト…」
その人物こそは美琴の想い人であり、学園都市の敵とされる人物である上条だが、美琴に透視能力（クレアボンス）は一切無い。なので、美琴は自身の想い人がカブトであることに全く気付けていない。美琴は拳を握り締めてカブトに向けて拳を振るうがカブトはそれをあっさりと避けた。その後、何度か拳を放つが先読みでもしているかのように避けていく
「ちょこまか避けてんじゃないわよ！」
カブトは攻撃を開始するが地震にはダメージは無い、美琴のガタックの方がスペックが高いのだろうかと予測した。美琴はこのスペック差を逃すはずも無く、ガタックゼクターの角を全開にしてキャストオフをするとガタックゼクターのボタンを押す
『ＯＮＥ、ＴＷＯ、ＴＨＲＥＥ』
カブトもこれに警戒したのかカブトゼクターのボタンを押す
『ＯＮＥ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ』
お互いにゼクターの角を元に戻して、
「「ライダー、キック」」
美琴はカブトから発せられた声に聞き覚えがあった気がしたが気には留めず、お互いにゼクターの角を全開にした
『『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』』
お互いに飛び上がりお互いの蹴りが激突する。お互いの蹴りが空中

で当たり、カブトの体が吹っ飛ばされて雑木林の木を薙ぎ倒して林の外に出て行った。カブトは、戻ってこない
「やった…ついにやったんだ……カブトを倒したんだ…」
美琴は変身を解除してカブトの変身者を確保する為に雑木林の外へ駆け出す。カブトの投げ出された方向に向かっていくと薙ぎ倒された木と一緒に倒れていたのは……
「嘘……でしょ…？」
彼女の想い人である上条当麻がその場で倒れていた。美琴は上条に駆け寄り上条の体を見ると腰の辺りに美琴と同型のベルトが巻かれているのを確認し、次に上条の体の状態を確認した。彼女は自分がしてしまった事の重大さに気付いた
「ねえ、起きてよ。もう一回笑ってよ…当麻ぁ……」
上条の心臓は一応動いているが既に消えかけの灯であり、何時死んでも不思議ではないほどの弱体化であった。彼をこの状態に陥れたのは他ならぬ御坂美琴本人であった。彼女は彼女自身の想い人を痛めつけてしまったのだ。今から病院に駆け込めば上条は助かるかもしれないが、今そんな事をすれば真っ先に怪しまれるのは彼女だ。それに彼女はまだ子供であり今この場で泣き崩れる事しか出来なかった
「上条さん！」
美琴を追って来た佐天が上条の体を揺する。そして美琴を殴り飛ばした。
「何でこんな事したんですか！貴女は後一歩間違えば犯罪者ですよ！」
美琴の思考が完全に停止する。佐天が言っている事は確かに正しい。幾ら犯罪者とは言え死刑判決無しで殺せば立派な犯罪である。美琴は後少しで自分の想い人をこの手で殺す事になってしまうところだったのだ
「食蜂さんですか！？今すぐあの公園に来てください！上条さんが！」

佐天もライダースーツを改造しているのか何処かに通信をしている。
その相手は最近上条と一緒に行動していた食蜂だ。間もなくして食蜂とゼクトルーパー達が到着し上条を寝袋のようなものに入れるとそのまま佐天と共に何処かに去って行った。そして食蜂は別れ際にこう言った
「もう二度と当麻さんに近付かないでくださねぇ。無能力者を全力で殺してしまった超能力者（レベルファイブ）さん。」
美琴の思考はこの日から歯車の抜けた時計のように動かなくなってしまった。御坂美琴の時間は今ここで停止した。

第八話「そして空っぽになった世界」

「お姉様は、もう戻らないんですの？」
「僕には彼女がどうしてこうなったのか知りたいんだけどね？彼女があの状態では聞き出す事すら出来ないだろうね？」
流石の冥土返し異名を持つこの医者も首を捻った。美琴はあの後、通信の際の電波を逆探知して見つけ出されたものの、誰が呼びかけても反応せず、一切動かず、口を開いても上条の名を呟き、ひたすら謝るのみ体には目立った外傷は一切無いが精神崩壊という状態で廃人となった美琴を治す方法が見つからないのだ。この場合、食蜂の出番だが食蜂はこれを拒否。上条も行方不明。表向きは御坂妹が美琴の代理として動いている。身体検査（システムスキャン）に関しては免除するように情報操作も終わっている。後は彼女の回復を待つのみとなった。だが、最悪美琴は一生このまま上条に何かを誤り続けながら死ぬかもしれない。
「ちょっと試したい事があるので席を外させてもらいますの」
「ああ、君に何か考えがあるなら頼んだよ？」
白井はそのまま美琴の病室に向かった。白井は今の美琴を見るたびに心を痛めており、一刻も早く回復をしなければいけない。白井はポケットから一枚の写真を取り出す。彼女の携帯から取り出した写真。その写真には罰ゲームの際の写真がある。白井はこれが役に立ってくれると祈り、ドアを開けたベットの上では上を見上げているだけのただの『人形』となった美琴が座っている。彼女の病室は一応上条が普段いる病室と同じなのだが一切の効果は無い
「お姉様、調子はどうですの？」
「……」
「今日はお姉さまに良い者を持って参りましたの」
「……」
白井はそう言って写真を美琴の目の前に差し出すと、美琴は脱兎の

如くベットの上から逃げ出し、部屋の隅で怯えていた。
「お姉様？どうしましたの？上条さんの写真ですのよ？」
「ひっ……ひっ……！」
美琴に見えていたのは上条の写真ではない。上条を殺したといい、美琴を大きく避難する無数の人々だった。
―あ、あれって無能力者を向きなって殺した能力者じゃない？―
―えーあれが？信じられない見た目は超可愛いのに―
―悪魔ってのはそういうモンなの。あ、こっち見てる目合わせないようにしないと殺されるかも―
「ち、違う。……当麻は……殺して……ない」
美琴の口から漏れたのは白井を驚嘆させた
「成程、そういう事でしたのね。お姉様、探しにいきますわよ」
白井が写真を収めて上条を探すべく美琴に近付いた時だった
「こ、来ない…で…。私を……そんな目で……見ないで……」
無意識に放たれたほぼ全力の電撃を白井は感覚で避けた。白井はコレ以上近付くのは絶対に不可能だと思った。白井は病室を去り、上条を探しに出かける
（本当、面倒ですの。あの類人猿……カブトでしたのね。それでお姉さまはそれを知らずにカブトを撃破。上条さんは既に死亡しており、あの状態に。しかし、あの類人猿の事ですから何処かで生き延びてひょっこり帰ってきそうなものですの死んでたらただじゃおきませんのよ）
白井は上条が生きていて欲しいとこの時初めて思えた。

上条はベットの上で妹達の一人に電気ショックを受けていた。つい先程、上条の心臓は停止した。先程と言っても数秒前の話だが
「上条さんは助かるんですか？」
「現段階では何とも言えないけどねぇ。当麻さんの回復力に期待するしかないのが現状よ。」

佐天と食蜂のどちらかが治癒能力を持っていれば多少は何とかなったかもしれないが生憎二人にはそんな能力は無い。食蜂はリモコンを操作して上条にとある感情を植えつけた
「何をしたんですか？」
「気休めに死にたくないって感情を植えつけさせたわ。多少は回復すると思う」
妹達の一体が立ち上がってこういった
「一応、心臓の方は回復しました、とミサカは報告します。この方の覚醒を待って、それから作戦を開始するのか妥当だと思われます、とミサカは提案します」
「駄目駄目。当麻さんを私のものにしてから。」
「ち、違います！上条さんはあたしのものになるんです！」
「ふっふ～ん。もう遅いよぉ」
食蜂は上条の左側に寝転がると上条の腕に抱きついた。
「あたしだって負けません！」
佐天は右側に寝転がり食蜂と同じように腕に抱きついた。やがて上条は柔らかい感触に包まれた状態で目が覚めた。そして最も強烈な左側を向くと
「上条先輩っ！」
「「あ」」
「んっ！（あっ！）」
食蜂に飛びつかれあっさり上条の唇は奪われた。食蜂は暫くその状態のまま動かなくなり、上条の理性をボロ雑巾のようにした所で唇を離す
「何すんだよ！上条さんの理性をここまでズタボロにして！」
「いいじゃないですかぁ。もう、上条先輩は私の彼氏（もの）になるんですから。」
佐天の方を見る。彼女に助けを頼めば何とかなる気がしたがそれは高望みであり、完全に思考が停止している。
「よそ見しちゃ駄目ですよぉ？

「だぁ～～！俺は中学生に手を出した凄い人なんて称号はいらねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
上条はクロックアップの如く走り去っていった。周囲にいた人物は思った。あの男は本当に人間なのかと

「はぁ」
上条は自販機に手を着いて何とか体勢を立て直す。危うく学校に行った途端殺されるかもしれない状態になるかもしれないというある種の修羅場から逃げてきたのだが、ここにも一つの地獄が待ち受けていた。
「やっと見つけましたの」
上条の目の前に颯爽と白井が現れた
「風紀委員（ジャッジメント）ですの！器物破損の疑いで連行させていただきますの」
「もうばれてんのか。はぁ、不幸だ」
「とりあえず、貴方の場合特殊な刑務所に送って差し上げますの」
白井に目隠しをされ、何処かの施設のような場所に着いたら目隠しを外された途端、蹴り入れられた
「それじゃ、そちらの方とお相手お願いしますの」
「え？」
ドアを凄い勢いで閉められ、上条が頑張っても開けられない状態だった。恐らく外から何かでドアが動かなくなっているのだろう。上条が溜息を吐き、恐る恐る病室の端を覗くとそこにいたのはにいたのは変わり果てた美琴だった。最初は何かに怯え、雷撃の槍を何本も打ち出すが上条はそれを右手で防ぎ、美琴を優しく右手で撫でた
「ほら、俺はもうここにいるぞ」
「とう……ま？」
「そうだ。上条さんの顔を忘れたのか？」
次の瞬間、美琴の止まっていたものがすべて動き出して上条に飛び掛り、大号泣して上条を押し倒して上条の体に頬ずりを何回もした

「もう、絶対に離さないから！アンタと私はずっと一緒だから！」
あながち嘘でもない気がする。何だかんだと言って上条の問題ごとの一部に美琴が関わっているものもある。上条は美琴の首にかけられているネックレスを見て目の色を変えて美琴からそれをひったくると病室の外に投げ捨てた。美琴もそれを急いで駆けつけ、ネックレスは地面に張り付くとワームに姿を変えた。本来、ワームは虫の形状をしているがこのワームはシェリー＝クロムウェルが使役していたゴーレムのような姿をしていた
「当麻…あれ、何？ネックレスが石畳にとり憑いたみたいに見えるけど」
「あれがネックレスの本質だ。本当はワーム探査用に使う石じゃなくてワームが同族を見つけるために使う石だ。人間が使用し続ければワームになる。あんな風になったのは初めてだけどな。まさかそんじゅそこらの石畳みたいなものでもワームか出来た何て知らなかったけれどな。」
「だったら、もう少し早く教えてくれればよかったんじゃない？」
「しょうがねえだろ。俺達の司令塔はお前とは考えが違うんだからな」
上条と美琴はお互いのゼクターをベルトに装着して変身すると病室の窓から飛び出してワームを二人同時に殴り飛ばした。二人の物語は今、片方を巻き込む形で交差し始めたばかりだ

第九話「動き始めた影」

ワームを殴り飛ばして二人はゼクターのボタンを押した
『『ＯＮＥ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ』』
そして二人は同時にゼクターの角を戻した。
「「ライダー、キック」」
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
二人同時に角を全開にして二人同時にキックを放ち、ワームが爆散した。二人のゼクターが飛び去っていくのを遠目に上条と一緒にどこかにそのまま出かけようと思い、上条が立っている辺りを見ると、既に上条の姿は無く、はるか彼方の方で常盤台の制服に腰の高さまである金髪を持つ少女が上条を引きずっているのが見えた。美琴は思ったあの男は一度くらいは嫉妬の怖さを思い知った方がいいと。最後の最後でこっちに上条を持って来ればいい話なのだから

上条は食蜂監視の下、ベットで寝かされていた
「あの～なんで俺はこんな風に寝かされているんでせう？」
「いいですか？貴方は病み上がりでついさっきまでは何時死んでもいいような状態で、尚且つ元気になったかと思えば今度は威勢よく飛び出して病院の病室から飛び降りてワームを退治するって普通考えたらありえない事です。よって、暫くそこで寝ててください」
食蜂は上条と隣に寄り添って上条に抱きつくと耳元で言った
「私と一緒にね。当麻さん♪いつでも襲ってください。当麻さんとなら何度でもしてあげますから」
（う、動けねえ。何か突破口があるはずだ。このままいたら本当に中学生に手を出した凄い人の称号が貰えちまうしなあ……）
もしも動ければ逃げられるのだが、今、上条の全身には食蜂操祈という精神的な枷が填められ、尚且つ今すぐにでも関係を築いてしま

えるような状況だ。上条はこの場から真っ先に逃げて美琴の方に行きたいのだが、
「御坂さん何かに渡しませんよぉ。私の魅力で当麻さんをメロメロにしてあげますからぁ。」
「えっと、何で呼び名が大きく変ってるんだ？さっきまで上条先輩だったのに」
「何かまずい事でもありますかぁ？」
「いや、別に何にも……」
食蜂の身長は上条と同じくらいで常盤台の制服ではない服を着れば誰もが高校生に見てしまうだろう。実際、上条がなんで常盤台のコスプレなんかしてるんだ？と聞いたらグーで殴られた
二人しかいなかった空間の扉が開き、一人の少女が入ってきた
「上条さん。帰ってたんですか。食蜂さん、退いてください！そこはあたしの席です！」
佐天のお陰でこの窮地を脱して全力疾走でシャドウの隠れ家から逃げ去ったのだが、偶然にも上条の高校を通ってしまい……
「にゃーカミやん。元気そうで何よりだにゃー」
「三下ァ、もう一回スクラップにしてやろうかァ？」
偶然にも下校途中だった一方通行と土御門という完全に死亡確定コンビと遭遇した。上条は１８０。回転して逃げようと思ったが、その先には食蜂達がいる。現在上条当麻は前門の虎、後門の狼という状況に陥っているが上条は思った。ああ、サヨナラ、この世と。
「とりあえず、死ンどけ。クソ野郎がァ！」
チョーカーのスイッチオンの一方通行が上条に飛び掛り脚力のベクトルを操作したキックで上条を全力で蹴り飛ばす。上条の体は投げ出され、土御門の近くに寝ているわけだが
「にゃーカミやん。嫉妬に彩られた男子の怖さを思い知るといいにゃー」
いきなり蹴り飛ばされ、その先の一方通行が上条を蹴り飛ばし、そして土御門が更に蹴り返して更に一方通行が……と∞ループになり、

上条が動かなくなった所でもういいだろうと、人目に付かないような所に放置された。上条は起き上がるとボロボロの体を動かしてどこか安全な場所を探しに行く事にした。視界も少しぼやけているし足元をみないとこける。さっきので骨何本折れただろうかと心配できるほどのゆとりすらない。ただ、安全地帯を目指す以外に考える事ができないが、そんな考える事さえも出来なくなっていく。上条の体に力が入らなくなっていく。幸い路地裏だったがそこに立っていた人間が異形へと姿を変えた

「ほうほう、貴様。この俺様の新しい力を試してやるよ。もう墜ちこぼれとは呼ばせねえぜ？」

上条はカブトゼクターを召喚して手に持つが、手の力が抜ける。カブトゼクターが地面に落ちて上条も倒れこむ。

「――――、――――――――。」

突然、『声』が『音』にしか聞こえなくなった。まるでスイッチでも切り替わったかのように、だが上条はそんなものは気にも留めずにカブトゼクターに手を伸ばすが、その手はワームに踏み潰された

「ほらどうした！？そんな玩具に頼らないと俺達と戦う事すらできないのかよ！？」

ワームの足に掛かる力は益々強くなる。上条は何とかカブトゼクターを掴もうとするが掴めない。

（はぁ、まさか今日が上条さんの命日になるとは思いませんでしたよ）

ワームが腕を振り上げて上条を仰向けになるように蹴り飛ばしてその腕を頭蓋骨目掛けて振り下ろそうとした時だった。ワームに何かがぶつかり、ワームの体がよろめく。その方向に立っていたのはガタックゼクターを構えていた美琴だった。美琴が変身するとワームは恐れをなして逃げていった

「――――、――――？」

上条には何と言っているのかが理解できない。ただ、彼女が心配してくれているという事位しか分からない。上条は大丈夫とだけ伝え

られた事を確認すると何処かへ向けて歩き出す
「――！」
上条に彼女が何といっているのかが理解できない。何も聞こえていないわけではないが耳から得た情報を脳が処理し切れていない。さっきのダメージで立っているのでさえ困難を極める。上条は次の一歩を踏み出す前に美琴が駆け寄って上条の腕を持って支える
「――――、――――――？」
やはり『音』としか認識できない。『声』を認識できないほど脳がダメージを負っているのか。それともそこまで衰弱しているのか。今の上条は美琴を振り払ってでも進もうとする。
「当麻！」
今の上条に『声』は認識できない。だけど、美琴が自分の名を呼ぶのだけは充分に理解できた。彼女は更に何か言っているが、上条には理解できない。理解しようとしても理解できない。

その光景を会社の社長室のような場所のモニターで眺めている者がいた。それは大柄な壮年の男性で、ＺＥＣＴの『表』の社長である。その男の名は根岸。彼は社長として然るべき格好であるスーツではなく普段着であるスカジャンを着ている。根岸はモニターから眼を離し、秘書のような女性に話しかける。
「しかし、彼は一体何者なんでしょうな。」
「さあ、私には分かりかねます。おや、帰ってきたようです」
社長室のドアが開け放たれてさっき逃げ出した不良がやってきた
「た、助けてくれよ！目標はカブトだけだろ？なんでガタックも相手にしなきゃなんねえんだよ！もっと力をくれよ！」
根岸は明るい声で不良に言った
「ははっ。君は随分と面白い事を言うねえ。だけど、成果を上げられない屑にはそういう物は恵まない。それが世の中のルールなんだよ」

「分かった。あいつ等をぶっ潰してくる！待ってろ！」
「ははっ、頑張りたまえ」
既に不良はそのまま駆け出していってしまっていた。秘書の女性は笑顔の根岸に向かっていった
「よろしいのですか？」
その疑問に根岸はモニターを指差して答えた
「今の彼女ならあんなゴミ屑でも時間稼ぎくらいはできる。」
そのモニターには道に倒れている上条とそれを見て何度も上条の名を叫ぶ美琴が映し出されていた

第十話「最後の仕事」

美琴は心底後悔していた。知らなかったとは言え上条に全力でライダーキックを放ってしまったのだから。もし上条が死んだとなれば自分が捕まる。だが、彼は生きて自分に会いに来た。そして計画の一部を身をもって知った。だけど、その後再会した彼は言葉を理解せず、ただ何処かを目指すのみで美琴が何度も呼びかけても変な回答しか帰ってこない。必死に上条を止めているうちに上条は糸の切れた人形のように倒れこんだ。美琴が見た感じでは今すぐにでも治療しなければ上条は確実に死ぬほど弱っていた。

「ねえアンタ……起きてよ！もう一回、私の前に立ち塞がって見せなさいよ！」

美琴の背後には以前、上条を襲撃したワームが佇んでおり、美琴に向けて飛び掛ったが銃弾がワームに命中した。乾いた銃声が響き、美琴とワームがそちらを向いた。そこに立っていたのは……

「しっかしよォ、ここら辺をブラブラしてたらこれまたワームのお出ましってかァ。このままじゃ帰れそうにねェし、ちょっくら潰すか」

そこに立っていた一方通行（アクセラレータ）は、銃をしまうとベルトのボタンを押してベルトが開く。一方通行は銃をしまうと緑色のバッタの機械を召喚した

「いい事教えてやる。コイツはなァホッパーゼクターっていうらしィ。リバーシブル式になってて切り替えが出来るっている触れ込みらしいが、面倒臭ェし片方しか使ってねェけどなァ」

一方通行はそう言ってホッパーゼクターをベルトに装填した

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

一方通行の姿が緑色のバッタのような姿に変った

『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

「あのクソシスターがそこの三下が帰ってこないとか何とかでうる

せェからお前潰して三下持って帰らせてもらうからなァ。」
「ふざけるな！お前の勝手な都合で殺されて溜まるかよ！」
一方通行はワームを蹴り飛ばして地面を転がるワームをサッカーボールのように蹴り続けながら言った
「所詮は不良って事かァ、いいか悪ってのが分ってねェンなら教えてやる。」
一方通行はホッパーゼクターの足を引っ張った
『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』
一方通行の片足に付いているバッタの足のようなものがたたまれ、一方通行が飛び上がると持ち上がったままのホッパーゼクターの足が戻った
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
「これが、悪党だ」
ワームは恐れをなして逃げ出しているが一方通行は確実に仕留めた。変身を解除すると杖を展開させて背を向けたまま美琴に言った
「早く行け」
「な、何でアンタなんかに指図されなきゃいけないのよ！」
「じゃあ、アレに三下が盗られても良いンだな？」
一方通行の指差した先には食蜂と佐天が上条を探していた
「本当は言いたくないけど、ありがとう一方通行。」
美琴は上条を抱えてそのままいつもの病院へ駆け出す。本当は一方通行は上条回収する筈だったが、元々ボロボロの上条を更にボロボロにしたのは自分であり、こんな状態で上条を回収すれば確実に上条は死んでいるだろうしそれでは打ち止めから完全に拒絶されるだろう。だから一方通行は健全な状態の上条をインデックスに差し出そうと考えたのだった。一方通行はこの時、彼の無事を祈った

「はあ……はあ……。お願いします！当麻が！当麻が！」
「はいはい。準備は出来てるよ？さあ彼をこちらに」

病院に急いで駆けつけた美琴はカエル顔の医者に上条を渡すとともにかく祈り続けた。彼の無事を祈った。暫くしてカエル顔の医者が手術室から出てきた
「あ、あの！当麻は！当麻はどうなったんですか！？」
「うん？一命は取り留めたけど、彼は今生命補助装置が無いと生きていけないくらい弱ってるね？」
「……」
美琴は思わず口を閉じた。上条に致命傷を与えたのは自分であったのだから。カエル顔の医者は言った
「まあ、彼は今ベットで横になってもらってるよ？そういえば彼はあの体で歩いたかい？」
「え、ええ」
「だとしたらそれは凄いね」
美琴の答えに対しカエル顔の医者は言った

「背骨が折れた状態で立てたってのは本当に凄いね？」

美琴は考える。背骨というのは人間が立つのに必要不可欠だ。そんなものが無い上条はどうやってあの場に立っていたのだろうかと美琴は考えていた時だった
「良ければ、彼に会ってみるかい？」
「はい」
美琴が通された病室のベットで寝ていた上条を見て美琴は驚いた。体中にコードが接続され、心電図を見てももあまりいい状況とはいえない。美琴はそんな上条を見て言った
「ねえアンタ、分かる？私だよ。」
「……」
「アンタさ、覚えてるよね。アンタと私が再会した時の事。あの時、アンタの制服を涙でびしょびしょにしちゃったわね。」
「……」

「アンタってさ、いつも勝手に突っ走ってちゃって怪我して帰ってきてたわよね。」
上条の来ている患者衣に美琴の涙が当たる
「折角、折角逢えたのに、こんなのって、こんなのって無いわよねぇ！」
御坂美琴が壊れた瞬間であった。美琴は上条の胸に顔を埋めて病室中に響き渡るくらいの声で泣いた。カエル顔の医者も暫くゆっくりさせてあげようとその場から離れ、この病室には死に掛けの少年と壊れかけの少女が残された。そして死に掛けの少年の右手が少女の頭に乗せられる。美琴が顔を上げると上条が途切れ途切れに言った
「お前に……頼みたい……ことが……ある」
「何！？私に出来るなら何でも任せて！」
上条はうっすら笑うと
「そうか……本当は……お前には……任せたくないんだが、御坂……ＺＥＣＴを……潰してくれ……。」
「え？」
「ＺＥＣＴは……学園都市を、ワーム製造工場へと変える気だ……。急げ、早く……」
上条が咳き込み、布団や美琴の制服に赤い染みが出来た
「アンタは、どうすんのよ」
「俺も、ある程度安定したら、行くからな」
「分かった。私はＺＥＣＴを潰す。だからアンタは元気になってあのシスターの所に行くこと。いいわね？」
「ああ」
美琴はそう言うとそのままその場を立ち去った。上条は生命維持装置を外して立ち上がる
「さてと、上条さんは人生最後の大仕事に取り掛かりますか」
上条が咳き込むと上条の手には鮮血が付いていた。上条は学園都市に帰ってきた時点で体のあちこちが死んでおり、まともに戦える体ではない所を無理矢理動かして戦っていたのだ。ライダーシステム

の負荷は本来少し運動した程度と変らないが上条の体は既にその程度でも倒れてしまうのだ。そして帰還直後に食蜂たちが急いで作った薬を服用し戦っていたが、その薬に予備は無く、効果の限界も近い。『声』が認識できなかったのもそのせいかもしれないと上条は思った。

そして最後に自分が命懸けで守りぬいた少女に心の中で別れを告げて上条は病室を後にした

第十一話「それぞれの思い」

上条が行動を開始して間もなくして学園都市中のモニターが一気に軍服を着用した根岸に変わった。学園都市中に緊張が走り、根岸は口を開いた

『我々ＺＥＣＴは度重なるワームの襲撃に対し、最終手段に出たいと思う。人間に擬態するワームに対抗する手段。そう！人類をワームに変えればワームには襲撃されなくなる。それでは今から実行に移す。少し苦しいかもしれないがワームに殺されるよりはましだと思う。それでは始め！』

根岸の合図で学園都市の機能は全て『殺された』。

美琴はいｋ病院を後にし、ＺＥＣＴ本社へ赴こうとしていた。さっきの根岸の演説で上条の話が真実であることも知った。

「お待ちなさい。お姉様」

ＺＥＣＴの正面玄関前で白井が美琴の前に立ち塞がった。その手には剣とサソードゼクターが握られている。背後には五メートル位の蟷螂のような兵器が二本足でたっていた

「黒子……」

「貴女がもしＺＥＣＴを潰そうとお考えなら、風紀委員（ジャッジメント）として拘束しますの」

「何言ってんのよ。今ＺＥＣＴを止めないと人類が危ないのよ？」

「お姉さまこそ、地球を支配するのは人類であるといつ誰が決めたんですの？人類よりもっと賢い生物が統治すればいい話ではないですの？」

「……」

刹那、後ろの機械が爆発して虚空から変身した佐天が姿を現した

「御坂さん！もし貴女に人類を救おうという意思があるなら、ここ

はあたしに任せてください！」
「佐天さん。ありがとう」
美琴は白井達を通り過ぎて先へ進んだ
「佐天さん。また貴女ですの？貴女は一体何者なんですの？」
「あたしは、『シャドウ』精鋭部隊、佐天涙子。あたしはあたし達の精神にのっとり、ＺＥＣＴを排除します」
「中々凄い事を掲げていそうですけど、わたくしは敵に対しては一切の手加減はしませんので」
『ＨＥＮＳＨＩＮ　ＣＨＡＮＧＥ　ＳＣＯＲＰＩＯＮ』
「そこら辺を頭に入れといて下さいまし！」

食蜂は妹達（シスターズ）と共に偽装車でＺＥＣＴ本社へ向かっていた
「今の所、御坂さんが向かったみたいだけど当麻さんが作戦直前に負けちゃったのが痛かったわねぇ。」
「『薬』の制限時間が残り３時間。学園都市の全人類がワームに変わるまでが残り４時間です、とミサカは報告します」
食蜂は今までで例を見ない位焦っていた。上条を早く保護してちゃんと治療をさせなければいけない。そして『シャドウ』の目標達成には上条の力が必要不可欠である。果たしてどちらを優先すべきか、自身の中にある感情のせいで、その答えは未だに出ないままであった

美琴は内部で警備を行っていたワームを全て全滅させて上を急ぐ。
「ったく、あの馬鹿。こんな大変な事をやってたの！？」
そして社長室のドアが開かれ、根岸がこちらを待っていたかのように立っていた
「やあ、始めまして。紹介するまでも無いが、私は根岸。ＺＥＣＴの社長をしている者だ。そして」
根岸の姿がワームへと変貌した

「新たな世界の統括者だ！」
美琴はガタックゼクターの角を全開にしてキャストオフを済ませると根岸に向かって果敢に挑みかかった。根岸は美琴の拳を片手で払い美琴を蹴り飛ばす。美琴の華奢な体は壁に叩き付けられる。美琴の絶望との戦いはまだ、始まったばかりなのだ

上条は変身した直後の状態で赤いカブトムシを模したバイクに乗っていた。向かう先はＺＥＣＴ本社社長室。上条の医師に合わせてバイクのサドルの部分にモニターとタッチパネルが出現し、上条が操作をすると上条とバイクのよろいが一気に吹き飛び、バイクにカブトムシの角のような巨大な角が現れ、一気に加速する。
「さてと、仕上げといきますか」
上条はアクセルを全開にしてウィリーをかけて飛び上がるとこの騒動の根本へと向かった

美琴は肩のクワガタの顎を模した剣を根岸に挟み込むように振るうが両腕で受け止められて、押し返される。そして首をつかまれて投げ飛ばされる。
（駄目だ……全く歯が立たない……）
「さてと、もう終わりにしようか」
根岸が腕から鎌を露出させて美琴に切りかかろうとした時、横の窓ガラスが割れて上条の乗ったバイクが根岸を投げ飛ばした
「よう！大丈夫か？」
上条は美琴に手を差し伸べて美琴を立ち上がらせると、上条と美琴は根岸のほうを見る。
「な、何故だ！何故貴様らはそこまで人間を守ろうとする！？地球はもっと優れた生物が支配すべきだというのに！」
「そんなの決まってんじゃねえか」

上条は根岸を睨み付けながらそう言って、さらに続ける
「人間が自分達に代わって世界をより良い方向に持って行ける生物に全部押し付けちまったら、そんなの、無責任すぎるだろ！自分達の借金を他人に押し付けてるだけじゃねえか！」
『ＯＮＥ』
「テメエがそうやって自分の負債を他人に押し付けようってなら」
『ＴＷＯ』
「まずは」
『ＴＨＲＥＥ』
「「そのふざけた幻想をぶち殺す！」」
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
美琴と上条の蹴りが根岸に向けて放たれる。美琴は根岸とは逆の方向に着地したが上条は根岸ごと後ろのワーム化装置を破壊した。当然、爆破からは逃れきれず、中に原動力として詰まっていたタオキン粒子を大量に浴びてしまい

上条当麻は二度目の『死』を迎える事となった

第十一話「それぞれの思い」（後書き）

という事で一応第一章完結です。
原作ではベツベレムの星を落として二度目の死であったので、今作では記憶喪失になっていないので二度目の死が今回となりました。
次回、エピローグです

第十二話「死んだ少年の未来」

あの後、上条は病院へ緊急搬送され緊急手術が行われる事となり緊張が走った。美琴は見ていた。上条が根岸に止めを刺して背後の装置を破壊した瞬間、巨大な光線に呑まれその光線は上条を突き抜けると少女の形を取り、どこかに飛び去って行き、上条が糸の切れた人形のように動かなくなったという光景を美琴は上条の無事を祈った。同時に思うもし上条が助からなかったらもう自分は生きていけなくなると。暫くしてカエル顔の医者が手術室から出てきた。カエル顔の医者は全員がいるのを確認すると口を開いた

「とりあえず結果だけ言おう。僕は彼を救い切れなかった。非常に残念だけどね？」

カエル顔の医者の言葉に美琴は意味を尋ねた。その質問に対し、カエル顔の医者はこう答えた

「現在彼の体の方は人間を超えた存在と人間の中間点という中途半端な位置にあって何時、どのタイミングで、どう変化して、どのようになるのかは分からない。まあ怪物の卵って言った所だろうね？そして次からが問題だ。彼は体の変化と引き換えに全てのエピソード記憶を失った。君たちに会っても初対面と同じ状態になるだろうね？」

「だったら私の能力で治せるんじゃないですか？」

「それは不可能だ。彼は先ほど言った通り人間の体ではない君達と同じ治療方法は一切通じない。僕も見てビックリしたけどね？良ければ彼には会ってみるかい？」

カエル顔の医者の提案に従い上条に会うことになった美琴、食蜂、佐天の三名が上条の病室にノックを入れてどうぞという掛け声で覚悟を決めて入り、上条は出会うなりこう聞いてきた

「あの、あなた達はどちら様ですか？もしかして、俺の知り合いか

何かですか？」

3人の思考が停止するが、美琴はそれでも溢れ出そうになる涙をこられて上条の問いかけに答える

「そうだよ、私たちはアンタの知り合い何だよ。覚えてない？」

「そう、ごめん。何も覚えてないんだ」

「アンタは壊れそうになった世界を救ったんだよ？」

「俺、そんな凄い事したのか！？」

美琴は必死に涙をこらえて自分に対してやや警戒をしている上条を見て上条に最後の質問をした

「私はね、アンタが好きだったんだよ？不幸だ不幸だって言ってても、ちゃんと自分の運命から逃げださないでちゃんと立ち向かってどんな絶望も打ち消してきた上条当麻が大好きだったんだよ？」

「ごめん」

カエル顔の医者は上条に会いに行く美琴らにこう言った

『できれば、彼の前で泣かないでほしいんだよ。彼に負い目を負わせると悪いからね？』

沈黙が支配しているこの病室の沈黙を破ったのは上条であった。

「あ、あのさもし無事に退院できたらこの一端覧祭ってやつにみんなで一緒に行ってみないか？」

上条の手にはおそらくカエル顔の医者から与えられたものであろうパンフレットが握られていた。美琴は頷くと食蜂らと病室を出て三人で泣いた。我ながらよく持ったと美琴達は思った。一しきり落ち着くと、全員で上条をどうバックアップしていくかという事を話し合った結果、暫くの間、美琴、佐天、食蜂の三人で上条に日常に必要なものを叩き込むという事と記憶がないという点と人間ではなくなりかけているという点を利用し研究者の元へ行ってしまわぬように原則的に誰かが一緒に行動するという事だ。今この瞬間『シャドウ』は上条を支える影として活動を始めた。

その後の事を少しだけ語ろう。
あの後、無事に退院し食蜂が前、好奇心で吸い出した上条の記憶を元に上条の知り合いの名前、呼び方、特徴等を叩き込む事に成功。上条は表向きとしては退院前と何ら変わりのない生活を送っている。記憶喪失の事が知り合いでも見抜けない位になったが、それを実行できる上条の演技力もすごいと一同は思った。一端覧祭の準備も一通り済み、後は本番を待つのみとなった一端覧祭一週間前に事件は起こった。
「久しぶりに当麻さんの寝顔を拝見しに行きますか」
時刻は草木も眠る丑三つ時、食蜂操祈は上条の寝込みを襲うというとんでもない計画を計画し、先に既成事実を作ってしまおうと考えた。現在上条は美琴達と同じ『シャドウ』本部で寝泊まりしている。インデックスは一方通行が預かることになり、平穏な毎日を送っていたはずだ。万が一過ちが起こるとまずいとのことで男女別の部屋で寝ているのだが、実際問題上条は鍵をかけるという事を食蜂が意図的に教えなかった為、何時でも寝込みを襲えるという状態を作り出していたのだった。
「それじゃあ、早速作戦決行！突撃～！」
食蜂は上条の布団に潜り込んだまでは良かったのだが、結局、上条の香りを堪能しているうちに眠ってしまっていたらしく朝、上条を起こしにやってきた佐天に発見された。この寝込み襲撃未遂事件は『シャドウ』メンバー内禁止である抜け駆けとなり、食蜂の代わりに真面目である佐天が上条と同じ部屋で寝ることでこれを防ぐという事になった
来週はいよいよ一端覧祭。だが、それがゼクターの力を得たもう一人の上条の手によって滅茶苦茶になるという事は誰にも予測不能だった

第十三話「一端覧祭」

つい先日まで第三次世界大戦の最前線であったロシアのとある研究所でとある研究者が漆黒のカブトゼクターを弄っていた

「これで、これで私の願望が叶うのだ！憎き学園都市への侵攻が！」

「ちょっとごめんなさいね。そのダークカブトゼクターとやらを頂くわよ」

刹那、無数のタオキン粒子が一か所に集まり、少女の形を作る。その少女は人間とは思えない力で研究者を投げ飛ばすとダークカブトゼクターとベルトを回収してベルトを着けた。

「これで、上条当麻（オリジナル）と条件は一緒。精々違う点があるとすれば記憶を盾にすればやりたい放題にできるって位かしらね。まあいいわ。このまま闇討ちでも何でもして『奪えば』いいか」

少女はタオキン粒子に姿を変ずるとベルトごとどこかに飛び去って行った。その後駆けつけた警備員が確認した所、研究者の首の骨が氷細工を砕いたかのように砕けていたという。この少女には名前が、『無い』。

一端覧祭とは学園都市全体で開かれるいわば大規模な文化祭の事だ。普段解放されないような進学校も解放され、入学説明会も行われている。このお祭り騒ぎの中、上条はというと……

「上条さん！あっちの方行ってみましょう！」

「ね、ねえアンタ。あっちに面白そうなのあるからちょっと行ってみない？」

「当麻さん！あっちで売ってるものなんか結構美味しそうですよぉ？」

三人の美少女に囲まれて学園都市を闊歩していたのだが、一般男子高校生からみれば冗談抜きで殺したくなるくらいの光景だが冷静に

なって考えてみれば、両腕の自由どころか体に一切の自由が利かず、尚且つ三方向に引っ張られるという地獄でしかない。見るのは極楽、行うは地獄というのを上条は今、体現しているのだ。しかもそのうちの一人は私的には当麻さんの方が美味しいと思いますけどね。という危険な発言をしている。現に一週間前に寝床に侵入されたのだから絶対に冗談ではないのは目に見えていた。

「あらあら当麻さん。ずいぶんと幸せそうで」

「当麻、せめて一人に絞った方がいいんじゃないか？」

「あらあら美琴ちゃんったらずいぶんと積極的になったのね～。母さんも嬉しいわ～」

背後から三人の声が聞こえる。上条の両親である上条刀夜と上条詩菜と美琴の母親である御坂美鈴である。普段の上条であれば真っ先に逃げ出すのだがこの状態では動くことすらままならない。偶然の出会いであった為、とりあえず四人は親たちから距離を置いて作戦会議を開くことにした

「で、どうするのよ？このままじゃまずいわよ」

「私にいい考えがあります」

「ホテルに連れ込むのは無しで考えましょう」

「だったら、上条さんと仲良くってる友達を演出してみてはどうですか？」

「オーケー、それで行くわよ」

そして親たちの元に戻り、各々の自己紹介をした後、上条が誰を選ぶかというのを散々問われた揚句、まだ決めてないですと答え事無き事を得た。勿論美琴は大いに応援された。その後、四人で学園都市を回り、色々遊んだ後、うっかり美琴達と逸れてしまい。上条は突如として到来した人波に流されていった。上条の不幸スキルを舐めていた三人であった。

上条は人波に呑まれた後、妙な少女に声をかけられ道案内をしてもらう事になったが、少女について行った先は人目のつかないような路地裏だった

「えっと、ここに俺の知り合いがいない気がするんだけど……？」
「平気平気」
少女はダークカブトゼクターを構えて
「あなたはここで私になるんだから」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』
「キャストオフ」
『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』
『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』
上条は少女が変身したライダーをみて唖然とした。そのライダーは上条が変身するカブトと瓜二つで色が黒を基調としている点を除けばまるっきり一緒なのだ。上条カブトゼクターを構えて変身して少女に殴りかかるが少女は石ころを蹴り飛ばすかのように上条を蹴り飛ばす。上条は壁に激突しその場に倒れ込むが、立ちあがって少女の方を見る
「テメェ……何もんだ？」
「私はあなた。正確にはあなたの記憶を吸収してあなたの抱いていた理想の異性像をまねて人間になった存在。名前はそうね……上嬢（かみじょ）桃子（うとうこ）でいいか」
上嬢はそういうと上条にゆっくりと歩きながらダークカブトゼクターのボタンを押す
「私の目的はただ一つ」
『ＯＮＥ』
「あなたの体を乗っ取って完全な人間になる事」
『ＴＷＯ』
「そのためにあなたの意志に抵抗されたらたまったもんじゃないから」
『ＴＨＲＥＥ』
「死んで？」
上条もとっさにカブトゼクターのボタンを押した
『ＯＮＥ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ』

お互いのゼクターの角を元に戻して一気に全開にしてお互いほぼ同じの技が放たれた。上条と上嬢が激突し上嬢が上条の体を見事なまでに吹っ飛ばした。上条の体ビルの壁にたたきつけられたが、上条から見れば上嬢の蹴りの力とビルの壁に押しつぶされたような感覚だ

「安心しなさい。その体は私が大切にしてあげるから今は眠りなさい」

上嬢が上条に手をかけたところで上条は残されたわずかな力で走り、日が傾いた学園都市を走り回る。ただ一つの絶望から逃れるために

「上条……さん？」

暫く学園都市をさまよった後、佐天にかなり衰弱した状態で発見されて自室にて治療を受けた晩、上条は自身の足取りを悟られないためにこっそりと自室から逃げ出した。だが、上条が抱いた絶望はうっすらと笑みを浮かべた

「中々賢明な判断ね。けど、後先考えず突っ走るっていうのが難点よね～」

上嬢は上条の混乱するありさまを暫く眺め、飽きたら同化を開始するという行動を始めた

上条にとって初めての大きな祭りの初日は最悪の形で迎える事となった

第十四話「絶望からの逃亡とそれを阻止する者」

「あぁぁぁ～～～！！！」

佐天の天地がひっくりかえるかのような叫びを耳にして妹達（シスターズ）が集まって上条と佐天が寝ている部屋のに到着すると、佐天の顔が真っ青になりおぼつかない足取りで上条のベットを指さしてその場に座り込んだ。妹達は上条のベットを確認して唖然とした。何故なら上条がそこにおらず、『捕まえようとしないでください』と書置きが置いてあったのだから。妹達は書置きに従うはずもなく、学園都市で警備をしている妹達を使って捜索を開始した。

佐天は上条が自分のせいで誰かに攫われたと思い込み、意識を失ってしまっている。

『シャドウ』は上条当麻という部分を失っただけだというのにも関わらず、ここまで追い詰められてしまった。

この学園都市に味方はいない

少なくとも上条はそう思った。人目に付かないように路地裏を渡って移動したり、人込み紛れたり。上条は上嬢と名乗った少女が万が一シャドウを襲撃した時の事を考えて本部から距離を置いているつもりだ。あくまでも上嬢の狙いは上条本人であってそれ以外には何の興味も無い。それに、自分の何かを知っている気がする。そんな気がしてたまらないのだ

「見つけました！と、ミサカは追跡を開始します」

警備をしていた妹達の一人に見つかり、上条は全力で駆け出す。妹達はあくまでも軍事用クローンだが突き詰めていくとその体力は女子中学生程度しかない。その分、数でカバーするという特性があるのだが、上条は今の所、後ろにいる妹達の一人から逃げるしかないのだ。そして路地裏に入り、抜けた所で出口に置いてあったごみ箱

に躓いて出口の所に立っていた人物の胸に顔を埋める事となった。
上条は急いで頭をあげて土下座を何度もしている。が、その人物は上条を見るなりこう言った
「えっと、とりあえず顔を上げてください」
上条が顔を上げるとその人影は食蜂達から教えてもらっている人物であった。
「えっと、五和？」
「はい！お怪我とかは無いですか？」
「あ、まあな……って場合じゃねえ！」
上条は五和の手を振りほどいて上条は迫りくる追手から逃げ出した。
そしてその追手をみた五和は上条の命を狙う何者かと誤解して海軍用船上槍（ウリスピア）を構えて追跡を開始した

この一連の流れを屋上から見ていた上嬢は笑いこげていた
「相変わらずのあのスケベっぷりは健在なのね。もうあれは能力って言えるんじゃないかしら？おっと移動するみたいね」
実はというと、上嬢には上条の生まれてから根岸を撃破するまでの記憶、思考が全て入っているのだ。言わば、コップの中の水を凍らせて氷の状態のままにしているのが上嬢で空っぽのコップが上条なのだ。つまり、二人は一人を二等分して全く別の方向に伸ばしたような存在で根本的思考は一緒である。上嬢はつい先程女子生徒を囲んでいた不良を一掃したばかりなのだが、実際問題彼女は人間ではなく無数のタオキン粒子が意思を持って行動しているに過ぎない為、ナイフで刺されてもすり抜けるだけで、いかなる手段を用いても傷一つ付かない。また、粒子の密集率を上げれば鉄より硬い拳を作る事だってできる。だが、この少女も上条とは違う意味で、空っぽなのだ。彼女は知っている怪物が世間に出ればどんな待遇が待っているかを

上条が振り返るとそこには誰もいなかった。上条は安堵の息を吐いてどこかの人混みに紛れようと思ったのだが、そこを邪魔するかのように美琴が立っていたが、上条はそれが美事で無い事を肌で感じ取った

「誰だおまえ」

「あらあら、ばれちゃってたかしら」

偽美琴はワームへと姿を変えて

「じゃ、面倒くさいからさっさと死んじゃってちょうだい」

上条は手にカブトゼクターを構えた

「変身」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』

上条はベルトに装てんした瞬間に角を倒したため、最初からキャストオフを済ませた状態だ。上条は偽美琴の肩を掴み、路地裏の更に人気のない所へ投げ飛ばす。偽美琴は超高速移動を始めたが、上条は臆する事無く、腰のボタンを押した

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

周囲の物体の移動速度が一気に落ちて上条は偽美琴を蹴り飛ばしてベルトのボタンを三回連続で押した

『ＯＮＥ　ＴＷＯ　ＴＨＲＥＥ』

上条はカブトゼクターの角を元の場所に戻してあの一言を呟いた

「ライダー、キック」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

再び倒された角を合図に一気に力が放たれ、偽美琴を倒して周囲の時間が元に戻り上条が変身を解除すると少し達暗みに襲われたが、上条は即座に持ち直しそのまま人混みを目指していった。

立ち眩みに襲われた際一瞬だが、上条には見えていた。自身の右腕が人ならざる者の形をとり、すぐに人間の腕に戻った光景が。

第十五話「そして逆転する日常」

刀夜達親は昨日に引き続き、一端覧祭に来ていた。常盤台で催されていたものには驚かされたが、それを超えて上条の高校で催されていた劇は群を抜いて面白かった。刀夜達は知る由もないが、この台本を手掛けたのは一方通行（アクセラレータ）で、人間の心理を完全に把握している彼だからこそできた劇であるといえる。そしてこの台本を完成させるのに打ち止めとインデックスの可愛らしい交渉をしている姿があったとか無かったとか。そして上条がいなかった事にされていたのは言う間でも無い

「にしても中々凄かったな～」

「ええ、にしても当麻さんはどこに行ったのかしら？また大覇星祭の時みたいにどこかを走り回っているのかしら？」

（そういえばさっき、一生懸命に走り回っていたのは上条君で合ってるのかしら？でも何かに追いかけられていたような……）

親達は一通りの事を終えた為、昼食を摂ることにした。上条刀夜は二人の女性に頼まれて、戦争（ばしょとり）に赴くことになるのであった

美琴と食蜂は上条が逃げ出したという知らせを聞いて本格的な捜索を開始した。美琴が上条の逃走ルートを絞り、食蜂がそこに妹達（シスターズ）を配置する事で作戦は実行に移された

見事上条は網にかかり、包囲網で取り囲み、とうとう捕獲された

「やったわね」

「ええ」

上条は未だに抵抗を続けていたようだが、痺れを切らした一人に銃で殴られて、失神させた状態にあるようだ。美琴達は上条への説教の為に準備を進めた。だが、突如として妹達（シスターズ）からの通信が途絶えた。食蜂が途絶えた所へ向かうとそこには上嬢が立っていた彼女の視点

の先では上条が気絶しており、足元には妹達（シスターズ）が倒れている。
「あら、随分と早かったのね」
「誰よ貴女。当麻さんから離れなさい」
上嬢が食蜂の方を見ると食蜂は鏡を見ているような気分になった。簡単にいえば上嬢はあくまでも上条の理想の異性像を具現化した怪物であり、その姿の一部に自分に尽くしてくれた食蜂の一部も取り込まれている。だが、一個のパーツが小さすぎて自分に似ているような気がする程度でしかない
「私は上嬢桃子。上条当麻を誰よりも理解できる怪物よ」
「な、何と言ってるんですか！上条さんを貴女に渡すわけにはいきません！」
上嬢は上条の体へと歩みより優しく撫でると、
「この状態なら大丈夫そうね」
上嬢の体がタオキン粒子に戻り、上条の体を覆い上条の体が上書きされるように上嬢になった
「さぁて、目標達成した所だし、軽く動作テストでもしますか」
上嬢はそういうとダークカブトゼクターを召喚して変身し食蜂も変身した。食蜂は早速、上嬢に向けて拳を放った。上嬢はそれを避ける事無く真っ向から受けた。上嬢は少し怯んだが、ダメージをものともしないような素振りでこう言った
「ねえ、一ついいこと教えてあげようか。この体はあくまでも上条当麻そのもの。私と当麻は一つになってるの。つまり、私を殺せばどうなるか位は理解できるでしょう？食蜂操祈さん？」
「何で、私の名前を！」
「私は上条当麻の記憶そのものなのだから当たり前でしょう？」
上嬢は上条を殺してしまうという危険に駆られ、動けなくなった食蜂を一方的にいたぶっていく。たった数秒の出来事だというのに食蜂はもはや意識があるのかどうかすら分からない。ライダースーツのスペックがあちらの方が圧倒的に高いのか、それとも上嬢が人間ではかなわない相手なのか、それすらも考える事が出来ない。だが、

食蜂は上条が逃げた原因をやっとの事で導き出した。この目の前の悪魔は前に一度、上条を襲撃し、上条と戦闘の末に上条に逃げられた。それから佐天に保護されて治療され、自分達の危険をなくすために逃げ出したのだと。
「何かを思いついたようだけど、もう遅いわね」
『ＯＮＥ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ』
上嬢はすでにベルトのボタンを全て押していた。
「さようなら。あの世で結ばれるといいわね」
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
食蜂に向けて放たれた最後の一撃を誰かが受け止めた
「いい加減にしなさいよ」
その少女は振り下ろされた上嬢の脚を押し返すと、上嬢、否、上条に叫ぶ
「そうやって何時まで操り人形やってんのよ、この馬鹿当麻！」
「馬鹿じゃないの？この体は今は私の制御下にあるの。上条当麻なんてもうそんざ……ッ！まだ……私にあらがえるだけの力があったっていうの？一体どこにそんな余力が！？」
美琴の声に呼応し、上条が覚醒したかのように上嬢は突如として苦しみだし、上条と上嬢に再び別れた。美琴はすかさず上条の体を抱えて上嬢を睨みつける
「あらあら、失敗しちゃったわね。いいわ、今回はここで手を引いてあげる。だけど、ソイツを保護したって事を私は知った。そして私はソイツ自身でもある。あとは自分で考えなさい」
上嬢の体はタオキン粒子へと戻り、そのままどこかへと去って行った。美琴は上条を抱えながらこう宣言した
「上等じゃない。いくらでも受けて立ってやるわよ」
襲いくる襲撃者への挑戦状としてその言葉は十分すぎるものだった

第十六話「邂逅」

「……ん？」
「眼が覚めた？」
上条が目を覚ますと美琴に膝枕をされている事が体感で分かった。
上条が起き上がろうとすると美琴が上条を逃がさんとしてがっちり拘束された。上条が周囲を見渡すと上嬢に襲われた場所で妹達（シスターズ）も食蜂もいない。ただ、上条と美琴がいるだけである
「あのさ、アンタに一つだけ教えてない事があったわね」
「何だ？」
「例えね、アンタがアンタが勝てない相手に遭遇してアンタに危機が迫ってても、例えそれが世界でも私達は絶対にアンを敵に回さない。絶対にアンタを守り抜いて見せる」
「そうか、ありがとうな。多分お前がこうしてくれてなきゃ多分俺は今頃俺じゃなくなってた」
「ううん、私の声がアンタに届かなきゃ私だって危なかったと思う」
上条と美琴は支えあうようにして立ち上がり、賑わう表へと歩き出す。
「とにかく、困ったら私たちを頼りなさいよ？」
「ああ、分かってる。俺は、もう一人じゃないんだな」
そして表の道に一歩踏み出した時だった
「あ、お姉様にヒーローさんじゃん。ちょうど良かった、ミサカに付き合ってくれる？」
美琴を大きくしたようなアオサイを着た上条くらいの少女と偶然遭遇し、公園のベンチに座り込んでいた
「とりあえず自己紹介からだね。私は番外個体（ミサカワースト）、見ての通り妹達（シスターズ）の一人だよん♪」
番外個体（ミサカワースト）と名乗った少女は自分のこれまでの経緯を上条たちに説明し、そして現在に至るまでを説明した

「つまり、アンタは一方通行（アクセラレータ）に相手にされなかったからここに来たわけ？」
「そういう事。とりあえず、学園都市を案内してくれる？」
「いいわね、今からやってる所もあるし、ちょうどいいわね」
「それじゃ早速行こうっか！」
女子二人の会話で勝手に決め付けられ、上条は女子二人に振り回される事となったが、上条はとりあえず残り二人に会うという事を伝えると単独で歩き出した。
「へえ、私の脅威も考えずに一人で行動するか、中々の勇者ね」
上嬢の声が唐突に周囲に響き、上条が周囲を見渡すが虚空に粒子が浮いているだけだった。上条がその粒子の方向をみると、粒子の方から声が聞こえた
「安心しなさい。今の私は見ての通り、再構成中なのよ。この状態で戦えっていう方が酷じゃない？」
「確かにそうだけど、何の用だ」
「別に、偶然見かけたからね。じゃこれ以上一緒にいると外野がうるさいから、じゃあね」
その言葉と共に上嬢はその場を去って行った。掴み所の無い奴だな。と上条は思いつつも先を急いだ

路地裏で上嬢は自分の体を再構成したが、視界は安定せず、立つのにも一苦労を要する
「これで、多分……平気よね……」
上条と無理に引き剥がされてしまった為、彼女の体は非常に不安定なものになっていた。上嬢はもう一人の自分の性格を考慮し、下手に介入されないように関心を逸らしたのだ
「さてと、何か……寄り代を探さないと……」
上嬢はそう言って歩き出す。彼女の真の目的を達成するために

学園都市の中枢である窓の無いビルの一室の中心に弱アルカリ性の液体に満たされたビーカーがあり、そこに逆さに『人間』が浮いていた
その『人間』は男にも女にも子供にも老人にも見え、また聖人にも囚人にも見える為、『人間』としか表現のしようがない。その『人間』、アレイスター＝クロウリーは目の前のモニターを見て少し焦っていた
「しかし、ここで幻想殺しがこうなってしまうとはな……。それに、ＺＥＣＴの『表』の顔が倒されてしまった事で私が『裏』の顔である事は隠しておきたいのだが……」
この場合、最も有力な対処方法は統括理事会から選出させる事だ。彼らならいくらでも替えが利くし、それだけの捨て駒にもできるが、アレイスターはこの状況をプランに応用できるように考え直し、プランを再構成し、その過程で必要な人材をリストアップさせていく
「そうだな……この男に次の『表』を努めさせるか」
アレイスターの意志に合わせて表示されたモニターに記載されていた名前は……
御坂旅掛（みさかたびかけ）

その男は言うまでも無く、美琴の実の父親であった
しかし、この『人間』の暴走は始まったばかりであった

第十七話「現れた絶望」

上条が病院の前に駆けつけると、駆動鎧（パワードスーツ）を着こんだ集団が病院の前に待ち構えていた。その集団の先頭に立っている男が上条の姿を見ると、こう尋ねた

「上条当麻だな？」

「ああ、何だよ」

「お前を我々の人形にさせていただこう」

その男の手に握られていたのは黒光りを放つ拳銃である。上条にその銃口を向けた。上条がカブトゼクターを召喚するよりも早くその男は引き金を引いた。銃の弾丸は実弾ではなく、麻酔銃に使われる小型の注射器であり、上条の眉間に直撃して上条はその場に倒れ込む。これはただの麻酔ではなく、統括理事長（アレイスター）の遠隔操作通りに上条を操作する為と、上条の体の状態を調べる為の特性の滞空回線（アンダーライン）が仕込まれている。ナノマシンでも十分なのだが、上条の体からそれを取り除かれても情報を盗み出せないようにする為と、発見されないようにする為という二つの意味がある

「回収しろ」

上条が動かなくなったのを確認した男が自分の部下に命じた。だが、彼の部下は上条に近いた途端に後ろに跳ね飛ばされた

「その方にそれ以上近づかないでください、とミサカは警告します」

そこに立っていたのは御坂妹だった。彼女の手には『オモチャの兵隊（トイソルジャー）』が握られている

「『シャドウ』か、面白い。だが、我々は既に目的は達成している。回収はいわばおまけだ。君達は所詮子供だ、その事を良く刻んでおけ。引き揚げるぞ」

男の合図で駆動鎧（パワードスーツ）の集団はその場から達去って行った。御坂妹は上条を抱えあげるとそのまま自分が普段寝泊まりしている病室のベットに入れた。あのカエル顔の医者の手を煩わせるまでも無く、上条

は放っておけば勝手に起きると判断した結果である。
「にしても、これは一体どういう薬品なのでしょうか？とミサカは疑問に思います」
御坂妹の手には上条を狙撃した麻酔銃の弾があった。彼女が目を凝らしてみると、側面にＵＮＤＥＲ｜ＬＩＮＥと記載されており、彼女にはそれの指すものが何なのかすらわからなかった
それと同時に病室のドアが開かれた

美琴は番外個体と一通り回り終えて公園のベンチに腰をおろしていた。その片手には空っぽになったヤシの実ジュースの缶が握られている
「そういえばさ、ミサカってこんなに魅力的な体してるけど一つだけなりたいものがあるんだよね」
隣に座っていた番外個体（ミサカワースト）が唐突にそう言った
「ふ～ん、何？」
「それはね……」
番外個体（ミサカワースト）は立ち上がり、美琴を見ると

「あなたよ」

番外個体（ミサカワースト）の体がワームへと変わり、片手の鎌を美琴に向けて振り下ろした。美琴は間一髪で避けたが座っていたベンチが真っ二つに裂けていた。それだけでも格の違いが分かるというものだ
「あらあら、流石は第三位ね。けど、私はこんな事もできるのよ？」
ワームの片腕が帯電を始め、美琴に向けてふるうと電撃の波が美琴へと襲いかかり、周囲が爆炎に包まれた
「あらあら随分とあっけないのね。前言は撤回しとくべきかしら？」
「アンタ、私を見くびってない？」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』
爆炎の向こうから美琴の声が伝わってきた
『ＣＡＨＧＥ　ＳＴＡＧ　ＢＥＥＴＬＥ』
変身した美琴が爆炎を払って美琴はワームへと駆け、ワームを殴ったがワームが体表は固すぎて拳の方が逆にダメージを喰らった。ワームから距離を置こうとしたが、時すでに遅く片腕の鎌に電撃が宿っていた
「ねえ、昆虫が人間にサイズになると人間は勝てないって知ってた？」
「さあね、でもこれはそれに対抗するために作られたってのを教えといてあげる」
美琴は時間を稼ぐべく軽口を言ったが、それを放った直後に鎌が薙ぎ払う形で振り下ろされ、美琴の体が吹き飛ばされる。近くにに落下したようだが、起き上がってくる様子はない
「さてと、これで後は三人か。楽勝ね」
ワームは再び番外個体（ミサカワースト）へと戻るとそのまま上条達のいる病院へ向かう。彼女の最終目的は『シャドウ』を崩壊させる事、つまり彼女は上嬢以上の怪物でもあるという事でもあるのだった

第十八話「潰れていく都市」

番外個体(ワーム)は目に着く限りの人やビルを破壊していった。お陰で彼女の通った後は何も残らない。だが、彼女は決して人を殺してはいない。殺すよりも死にかけのままでじわりじわりと死に陥れる。これが彼女が考える苦痛であり、彼女の楽しみでもある。今までも様々な人間に擬態してはこのような事を数年前から繰り返してきたのだ

「つまんないわね。何年経っても人間っていうのは変わらない。もっと刺激が欲しいわ」

「だったら、良い刺激を与えてやるよ。クソ野郎」

番外個体(ワーム)が背後からかかった声の方を向くと、そこにはホッパーゼクターを構えた一方通行(アクセラレータ)が立っていた。

「変身」

『ＨＥＮＳＨＩＮ　ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

一方通行(アクセラレータ)はワームへ姿を変えた番外個体(ワーム)に挑みかかっていった

浜面仕上は目の前で戦っているワームと一方通行(アクセラレータ)の戦いに加担しようと思っていたのだが、一緒に回っていたフレメアが負傷、この状況下では救急車も使えない為、病院へと急いでいた

「フレメア、もう少し待ってくれよ」

「大体……大丈夫……にゃあ……」

腕の中のフレメアは弱弱しく笑って見せた。浜面はその笑顔を見て立ち止まるわけにはいかないと決心した。愛用の『ドラゴンライダー』は一端覧祭という場所を考えれば使用できるはずもない為、今回は持っていない。浜面がフレメアを抱えながら走っている時に、浜面の携帯の着信音が鳴り響き、浜面が片手でフレメアを抱え直し、空いた片手で通話ボタンを押した。ディスプレイを見る限りでは相手は絹旗だった

『浜面、超大丈夫ですか！？今そっちは超大変なことになってるみたいですけど！』
「今それに巻き込まれてフレメアが負傷した。俺が見る限りでは骨が何本か折れてる。それで今病院に向けて全速前進中だ！」
『浜面、超気を付けてください。麦野が多分助けてくれますから』
「おい！多分ってなんだよ！多分って！」
絹旗はその問いかけを無視して勝手に通話を切った。浜面は舌打ちをして携帯をしまい、近くの病院に駆け込むと医者にフレメアを預けてさっきの場所に戻ろうとした時だった。
「は、ま、づ、らあああああ！！」
病院の入り口で麦野と遭遇し、浜面の胸倉を掴んだ。その目は殺気に溢れている。浜面にとってこの光景は日常茶飯事でもあるのだが、今日に至っては殺気がいつもより満ち溢れている
「えっと、あの、麦野さん？一体どうされたんですか？……ハハハ」
「オ・シ・オ・キ確定ね」
麦野の原子崩しは使い方によっては空を飛ぶこともできる。硬い岩盤などに当てれば当然麦野の体が反動で浮く。その原理を利用して空を飛ぶのだが、制御が結構難しいと麦野本人も言っていた。が、麦野は右手で原子崩しを地面に打ち込み空中に立つと、浜面をその方向に思いっきり投げ飛ばした
「ふざけんじゃねえよ！死んだらどうするつもりだよ！」
浜面は一方通行（アクセラレータ）のものと色違いのホッパーゼクターを召喚すると、腰のベルトに装填した
『ＨＥＮＳＨＩＮ　ＣＨＡＮＧＥ　ＰＵＮＣＨ　ＨＯＰＰＥＲ』
浜面は拳を握ると、ワームに向けて拳を放った
一方通行（アクセラレータ）はおかしいと思っていた。この目の前のワームは辺り一帯を壊滅させる程度の能力を持っているはずなのに、なぜ自分にここまで時間をかけるのだろうと。一方通行（アクセラレータ）はワームを蹴り飛ばすと構

えなおした。目の前のワームが立ちあがった時だった
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」
空から浜面が降ってきたのだ。おまけにワームを落下の衝撃で殴り飛ばしたのだ
「よお！遅くなった！」
「ハッ。テメェなンざいなくても俺一人で十分だっつゥの」
「そう硬い事言うなよ。足引っ張るなよ」
「お前がそれをやらねェか俺が心配だけどな」
『『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＮＰ』』
二人が同時にホッパーゼクターの足を上げて同時に飛びあがるとお互いの必殺技を決めようと構えた
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
『ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ』
二人同時に必殺技を決めるはずだったのだが、ワームの姿が突如として消え、背後から電撃の鎌がに初連続で放たれ、二人は地面にひれ伏す事となった
「さてと、残るは……一人ね。この街も大したことはなかったわね……」
ワームは人間の形態に戻るとそのまま歩き出す。向かう先は、上条のいる病院である。彼女は知らない。上条が人間を超え、神の領域の手前に立っている生物であるという事を、そして、アレイスターの声がけ一つで世界を一瞬で焦土にできる存在にもなれる。という事を。そして動き出すのはとある少年の影、少女の体を借りて彼女の体に作り変えると、少年のもとに走り出た。少年を救うためにそして今、学園都市の存亡は少年の覚醒にかかっているのだった

第十九話「絶望は天使によって取り除かれる」

アレイスターは上条への『注入』の成功の報告を受けて僅かに口元を歪めた。

「ご苦労だった。しばらく休んでくれ、三島正人」

三島正人、上条を襲撃した男の名であり、壊滅した猟犬部隊（ハウンドドック）アレイスターの手足として活動している『組織』の隊長である。

『了解しました。それと、もうひとつ報告がございます』

「何だ」

『上条当麻に導入予定の『天使』の符号化に成功しました。だがしかしこれを遠隔操作で導入するのには困難を極め、推定でも数十年はかかります』

「いや、別にかまわん。最悪、こっちで操作すればいい。仮に回収は保険なのだからな」

『了解しました』

三島は通信を切断し、アレイスターの意思に合わせてモニターが映し出され、上条と上嬢とワームが映し出されていた

「これで一つに戻ってくれればいいのだがな……」

アレイスターは珍しく不安の声を漏らしていた。だが、アレイスターはもう一つの方に目をやった。その視線の先に会ったモニターに表示されていたのは

Ｐｒａｎ　Ｔｏｍａ｜Ｋａｍｉｊｏ　４６％

Ｎｏ．６　Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏ　１００％

それと、人形のように整った顔立ちした少女が映し出されている。その顔は凍りついているように無表情で全身の肌の色も死人のように青い。だが彼女、『絶対零度（アブソリュートゼロ）』の少女はこれで健康体なのだ

この『人間』は不完全な歯車を強制的に動かして世界への復讐を早期実行に移そうとしている。自分の素生が知れている以上、尚更の事だった

上条は目を覚ますと御坂妹共に病院の玄関に出ていた。外は快晴と呼べる天気であるが、妙に人の気がない
「良い場所でしょ？」
上条は声のする方向に振り向くと、そこにはあのワームが立っていた
「なにも無いまっさらな状態。『無』こそが最高の芸術よね」
「テメェか。ここまで学園都市を壊滅させたのは」
「あら？あなただって似たような物じゃない。人間捨てちゃって化物になり替わろうとしてる。あなただって私みたいになる可能性だってあるのよ？」
「違ぇよ」
上条はカブトゼクターを構えてワームを睨みつける。
「俺はテメェみてぇにはならねえ。例えお前みたいになったとしてもな」
「あらあら。随分と愚かな事」
「変身」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』
『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』
上条の変身が合図になったかのように全員が臨戦態勢に入った。そして今、決戦は開始された

上嬢は美琴の体の体を借りて上条のもとに急いでいるのだが、思うように体が動かない。だが、彼女は止まるわけにはいかない
「全く、面倒よね」
彼女はとある少年のもとへ急ぐ。彼女にとって知らない場所で彼に死なれるのは彼を手に入れるのが非常に困難になるため、極力避けたいのだ。だから、彼女は少年の守り手となり、少年のもとへ向かう。

彼女の手にはダークカブトゼクターが握られ、影を過ぎた時、彼女の姿は虚空へと消えた

上条はワームの電撃の鎌を避けながらワームの鎌を抑え、その隙に御坂妹が援護していたが御坂妹が突然、腹部を裂かれて重傷を負うという事態が発生。上条は早急にこれを片づけなければいけなかった。でなければ、御坂妹が死亡する。彼女を死亡させるわけにはいかない。上条のその感情は焦りに変わり、次第にワームに圧倒されていった

「足元がおるすだけど大丈夫かしら？」

ワームの足払いで上条の足元が揺らぎ、ワームに電撃の鎌を叩き込まれる。上条は咄嗟に防いだが、防ぎきれず少し揺らぐ。だが、その揺れる体を誰かが抑えた上条がその方向を見ると、それは上嬢だった

「上嬢！？どうしてお前がここに！？

「決まってるじゃない。勝手にあなたが倒されないように守りに来たのよ」

上条は自分に対する味方が仮にそれが敵であっても今は頼るしかない。目の前の敵はそれほど強大なものなのだ

「あらあら、そのあなたにそっくりなお友達はどんな芸術を見せてくれるのかしら？」

「ええ、最高の芸術を見せてあげるわ。ねえ」

「ああ、見せてやろうじゃねえか」

「「俺（わたし）の最高の芸術を！」」

『『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』』

ワームと同時に超高速移動に入った二人はワームの攻撃を避けながら、完璧なチームワークでワームにダメージを与えていく

「へえ、面白いのねあなた達って。でも、これならどうかしら？」

無数の電撃の鎌が発射され、上条達に襲いかかるが上条達は軌道を

読んで回避してお互いのゼクターのボタンを押していく
『『ＯＮＥ，ＴＷＯ，ＴＨＲＥＥ』』
『『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』』
二人同時の攻撃を不幸にも真っ向から受けてしまい、ワームは爆発した。

御坂妹も無事に一命を取り留め、昏睡状態であった佐天も目を覚ました。上嬢と上条は病院のロビーに立っていた外も夕暮れであり、一端覧祭など結局有耶無耶になってしまったのだが、二人の表情は曇ってはいなかった
「あのさ、大事な彼女。大事に守ってあげなさいよ」
「え？」
上条が利き返す頃には上嬢はさよならとだけ告げて、上嬢の体は美琴の体にも戻り上条に体を預けるように倒れた。あれは幻想だったのだろうか。と上条は思った。上条は美琴を医者に預けると外に出て学園都市の夕焼けを眺めて哀愁に浸っていた時だった
「上条さん、何してるんですか？」
「ああ、いやなんでもねえよ」
上条に声をかけてきた佐天と共に帰途に就いた

滝壺理后はその日の晩、手紙を浜面の枕元に置くとその場から逃げるように去って行った。その手紙にはこう書かれていた
『はまづらへ
はまづらの浮気性にはもうついていけなくなったので暫く旅に出ますさようなら
Ｐ．Ｓ．はまづら死んじゃえ』
そして、浜面の布団にはには少し濡れた跡が着いていた。
そして彼女が向かうのは新生『アイテム』の住居からはなれた場所

であり、見つかりにくい場所。
つまりは、一方通行（アクセラレータ）の家か、『シャドウ』本部位なのであった

第二十話「爪痕」

上条は目を覚まし、隣で寝ている佐天を起こさないように外に出て隣の美琴達の部屋を覗く。
あらかじめ説明しておく、ここは美琴達が仕事上の都合で寝泊まりする為に用意された部屋である。つまり……

上嬢桃子が寝ているなど、ありえないのだ

上嬢は目を開けると目を擦りながら体を起こした
「あ、おはよ……」
台詞を全部聞き終える前に上条はドアを閉めて食堂の方へ向かおうと、美琴達の部屋に背を向けると上嬢がドアを全力で開け放ち、上条に飛びつく形でのしかかった
「いきなりスルー？ちょっと人の扱いがなって無いんじゃないの？」
「痛い痛い！お前何でここにいんだよ！そもそもお前人じゃねえだろ！」
「だって勝手に死なれると困るのよ。私だってここにいたほうが落ち着くしね」
上嬢は上条を引っ張り上げるとそのまま食堂の方へ引きずって行った

麦野は浜面の隣に座りながら浜面にこう尋ねていた
「ねえ浜面、私さ、お弁当を作ってみたから今日どっか行ってみない？」
「いや、俺ちょっと……」
「滝壺を探しに行くなんて言わないわよね？」
「なんでもありません」
「よろしい♪」

浜面としては麦野の危険極まりない愛情のこもった弁当より恋人である滝壺を探しに行きたいのだが、流石に麦野の前で言えるほどの勇気はない。言ったら殺される。これ位は浜面でも理解できる。実際、以前麦野が作った弁当に睡眠薬が盛られ、眠らされている最中に麦野の寝室まで運びこまれて縄で両腕を縛られて既成事実を作りかけたという恐ろしい記憶しかない。それ以降からだった、滝壺と話そうとしても無視される反応もどこかそっけない。最終的には、死んじゃえと手紙で言われ、逃げられた。もはや麦野の罠としか言えない。

「そ、そうだな。今日は天気もいいし、行ってみるか」

「やったぁ♪」

浜面は麦野をどう退け、尚且つ短時間で滝壺を探しだすかを考え始めた

滝壺はとある高校の学生寮に向かっていたはずなのだが、途中で道に迷い、途方に暮れていた所、滝壺よりも背の低い少女（本人は教師と主張）と共に歩いていた

「で、貴女は誰なのですー？」

「私？私は滝壺理后。貴女は？」

「私は月詠小萌なのですよー。みんなからは小萌先生って呼ばれてるのですよー。こう見えても教師なので迷える生徒ちゃんの相談に乗る位ならできるのですよ」

「先生ごっこ？」

「違うのです！先生はれっきとした先生なのですよ！教師免許だって持ってます！ほら！」

確かにこの少女は先生だ。どういう理屈なのだろうと滝壺は考える。

（まさかこの先生も何かの実験の影響でこうなった？）

「分かりましたか！とにかく付いてくるのです！」

滝壺はそのまま小萌先生に続いて行く滝壺だった

一端覧祭も終盤に入り、屋台の値段も下がるころだが、上条と佐天の表情はやや曇っている。上嬢はちょっと用事あると言って佐天が起きる前にどこかに去って行った。さっき病院の方へ出向いたが、食蜂も美琴も目を覚ましていない。一応生きているのだが、目は覚めていない。実質的に『シャドウ』は活動停止となりしばらくは上条の寮で二人は生活する事になった。佐天の裏切りは学園都市の警備組織に知れている為、実際は何もされなくても快くは出迎えてもらえないかもしれないという上条の心配によるものだった

「えっと上条さん」

「ん？」

「今悔やんでも仕方ないです。折角ですので、御坂さん達の分も楽しみましょう！」

「そうか、じゃあ御坂達が起きた時、思いっきり思い出話をしてやろうぜ！」

「ええ！」

「あらあら当麻さんは結局その娘がお気に入りなのね？」

上条と佐天が意気込んだ所で上条の母、上条詩菜が少し笑って立っていた。もう軌道修正はできそうにない。そう思う二人であった

第二十一話「世界の破壊者」

上条は困惑した何故ここに母親が？と。詩菜は表情を変えず
「母さん的には当麻さんは美琴さんがお好みだと思ってたのだけれど、当麻さんは普通の娘がお好みなのね。所でそこのステキなお嬢さん、あなたの名前は？」
「佐天涙子です！」
「そう、佐天さん。当麻さんは結構女性からの人気が高いから、気をつけてお付き合いしてくださいね」
「はい……」
「そして当麻さん、佐天さんはまだ中学生のようですから、うっかり手を出してしまわないようにね？」
「ちょっと待て！俺は別に佐天と付き合ってないぞ！」
「あらそうなの？じゃあ佐天さん。頑張ってくださいね。あなたも当麻さんのお嫁さん候補に加えておきますからね」
詩菜はそのまま手を振りながらどこか遠くの方に歩いて行った。上条が佐天の方を見ると佐天は顔を真っ赤にしながら上条にパンチを向けた
「何すんだよ！」
「……少しは人の気持ちを察してください」
「？」
詰まる所、上条は記憶を失おうが何だろうがその鈍感さは変わらないのであった

門矢士は自身の写真館の絵を見ていた。その絵には夜の街で優雅に立つカブトが描かれていた。そして門矢はその絵に近づいてカブトを見た。そのカブトは右半身が紅い龍人のような怪物になっているのだ。だがカブトの一部として溶け込んでいた

「どうなっている……カブトにそんな能力はないはずだが……？」
「どうしたんですか？ここが何の世界だが分かりましたか？」
光夏海が困惑していた門矢に話しかけた。
「何でもない。ここはもう一つのカブトの世界だ。多分、この世界にもワームがいる」

彼は、世界の破壊者ディケイド。いくつもの世界を巡り、その瞳は何を見る

門矢は写真館の外に出たが、服装は変化していない。試しにポケットをあさってみると一端覧祭のパンフレットと学園都市の入場券が入っていた
「なるほどな。この俺が観客になれってか。中々度胸のある世界だ」
「そう硬い事言うなよ～ちょっと士そのパンフレット貸してみろ。ほら！この常盤台中学って所でやってるバイオリン演奏会なんか面白そうじゃん！」
この門矢の脇ではしゃいでいる青年は小野寺ユウスケ。クウガの世界のライダーだったが、今はこうして門矢達と共に世界を回っている
「中学生の演奏会なら保護者だけを呼べばいだろう」
「そうでもないらしいぜ。なんかこの演奏会学園都市の有名人の御坂美琴っていう女の子が演奏するらしいぜ」
「何度言えば分かる。俺はガキのお守はしないつもりだ。ユウスケ、行きたいならお前ひとりで……」
門矢が台詞を最後まで言い終える前にワームが目の前に表した。門矢がディケイドドライバーを腰に巻いてカードを構えた時だった
「上条さん！いました！」
バイクにまたがった上条と佐天が門矢とワームの間を割って入り、佐天はグリップを上条はベルトを取り出して構え、お互いのゼクターを手に構えて、
「「変身！」」

『『ＨＥＮＳＨＩＮ』』
お互いに変身を済ませると、上条がワームに駆け出して上条がワームの気を引き、佐天が射撃する。この図式でワームをキャストオフする前に撃破した。二人は変身を解除して
「はあ、二人のコンビネーションはばっちりでしたね！」
「まあな」
「上条さん！さっきから反応が素っ気ないんですけど、どうしたんですか？」
「いやなんでもない」
上条は考えていた。自分の花嫁候補が数名いるという事について。
一人は佐天、では他のメンバーは？という疑問に頭を悩まされていた
「おいお前」
傍らで見ていた門矢が上条に詰め寄り、駆け寄って上条の襟首を掴んだ
「お前、龍について何か知ってるか？」
「いえ、何も知りませんよ……ハハハ」
上条はとりあえず愛想笑い。門矢は上条を下ろすと
「そうか、ならいい。こっちが力ずくで龍を叩き起こせばいいだけだ……変身」
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』
門矢はライドブッカーを剣に変形させると上条に向けて振り下ろし、上条はとっさに腕で頭を守り剣を腕で受け止めた
「ほら、やっぱりそうじゃないか」
上条が閉じていた目を開けて自分の腕を見た。そこには……
真紅に染まった鱗が腕全体を覆い指先が鋭利な爪に変わり、門矢の剣を受け止めていた

第二十二話「覚醒」

「最大主教(アークビショップ)！」
ステイル＝マグヌスは最大主教(アークビショップ)の通り名を持つローラ＝スチュワートが倒れたと聞いて急いでローラが入院している病院へ赴いたのだった
彼女はベットに身を預け、窓から外を眺めていた。ステイルの声に気付いたのかステイルの方を向いてステイルは驚愕した。ローラの顔半分が隠され、包帯の境目からはヒビのようなものが少し見え隠れしていた
「大丈夫なんですか！？突然倒れたりして！」
「平気……よ……」
「全然大丈夫ではないじゃないですか！ほら、早く寝てください」
「ステ……イル……」
「何ですか、最大主教(アークビショップ)？」
ローラはステイルの顔をゆっくり寄せると耳元でこう囁いた
「龍には関わるべからずなのよ」
ローラはそれを言い終えるとステイルに身を預けるようにして眠りに就いた

上条は自分の腕を見る。それは人間、ましてや幻獣のようなイメージを抱く
「これが……龍……」
門矢も驚いて剣を引き戻して再度上条の腕に向けて剣を降ろすが、傷一つ突くどころか、逆に自分に衝撃が返ってきた。門矢は思わず手を離してしまい、地面に剣が落ちた。
「どうなってやがる……まるで人間じゃないみたいだ」
門矢は剣から一枚カードを引き抜き、ベルトに装填した

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＫＩＶＡ』
門矢の姿が変わり、蝙蝠のようなライダーに変わった
「化物には化物だ」
門矢は上条に向けて走り出し、我武者羅に攻撃を加えていく。上条は抵抗できなかったが、殴られた部分から浸食されていくかのように変化していく。そして門矢の蹴りが上条の頭に当たった時、上条の体が何かに侵されていくように龍人の姿に変貌した。
「やっとおでましか！教えてもらおうか、それは何だ？」
「俺にだって分からねえよ！テメェに攻撃されたらこうなったんだよ！」
「成程、結局試し続けるしかないって訳か」
門矢が拳を握り、上条に飛びかかった時だった。上条の体が宙に浮き、背中から巨大な羽を展開させた。そして手の甲からは巨大な爪のようなものが伸び、完全に龍人となった顔の目が紅く染まった。
「君に彼を殺されては困る。だから、君を今ここで彼を借りて殺す」
上条はそう言うと、門矢の前に瞬間移動し門矢を爪で切り裂いた。門矢の体が地面に投げ出され、上条は容赦なく攻撃を続ける
「上条さん！元に戻ってください！」
佐天が上条にしがみつき、上条を抑えようとするが上条は佐天を掴みあげて投げ捨て、更に門矢に攻撃を続ける。
その時だった。上条の体をタオキン粒子が包み込み、上条が人間の姿に戻り上条の体を受け止め、一人の少女が姿を現した。上条はそのまま倒れ込み、少女の腕の中で眠りに就いた
「やれやれ、どれくらい経っても私は私ね～」
その少女はどこか上条に似ていた。少女は上条を地面にゆっくり降ろすと、門矢に手を差し伸べて、
「私は上嬢桃子。もう一人の私が迷惑かけたわね。何か御礼でもしましょうか？」
「俺に構うな。それより、もう一人のお前ってどういう事だ？」
「そうね……それじゃ、少し休める所で説明しましょうか」

上嬢は上条に憑依を済ませると、そのまま歩きだした。上嬢に連れられ、門矢達が着いたのはシャドウの本部。
「それじゃ、少し椅子に座って待っていてください」
上嬢が門矢達を待たせ、お茶を出そうとした時だった。襟の後ろを掴まれ、強い力で引っ張られ、壁に叩きつけられ、壁に寄り掛かる形で座り込んだ
「上条さんの体を返しなさいよ！！」
上嬢が頭上から聞こえてきた声の方向を向くと、完全復活し上条に会う為にやって来た食蜂操祈が立っていた

第二十三話「絶対零度（アブソリュートゼロ）」

上嬢は食蜂にだけは会いたくないと常日頃思っていた。理由はただ一つ。記憶の中の食蜂の上条へのアタックが尋常ではなかったからである。

「その体から離れなさい！今すぐ！」

「今離れたらコイツは今日から学園都市の人形になるわよ！」

上嬢は迫りくる食蜂をどけてお茶を用意して佐天に食蜂をどこかへ連れていくように指示して自分は門矢達の部屋へ戻った

「それじゃ、この世界の説明をしましょうか」

「その前に一つ聞いておきたい。お前は男か？女か？」

門矢の質問に対し、上嬢は余裕の表情を崩さず、答えた

「『私』は女だけど、ベースの肉体は男。簡単に説明すれば素体のマネキンを改造した。とでも言っておこうかしら」

「つまり、お前は男女問わず憑依できて、お前のその状態に変更される。って事で良いな？」

「ええ。それじゃ説明に入るわねこの世界は二年前に隕石が到来した事でこの街でワームが人間になり済ましてはこびるようになった世界。たまにこの街の外に出て生活しているワームもいるみたいだけどね。そして……」

上条の説明の途中で本部の入口の方から窓が割れる音が響いた

上条の両親は美鈴が美琴が入院したという知らせを受けて病院へ走って言った為二人っきりである。そして休憩所の机の上に何枚か写真を広げていた

「とりあえず今これだけ当麻さんのお嫁さん候補がいるわけですよ」

「母さん。当麻にはちゃんと了解をもらったのかい？」

「いいじゃないですか。当麻さんは優しいからきっと誰も選べない

とか言い出すんでしょうからこっちで選んであげてそれから当麻さんに決めさせないと孫の顔も見れませんよ？」
写真に写っていたのは美琴、佐天、食蜂、五和（上条の所在を詩菜に尋ねてきた所を写した）、同じ要件で自分に尋ねてきた神裂、そして幼く、顔にはやや赤みのかかった幼き日の『絶対零度（アブソリュートゼロ）』の少女だった

「どうも～当麻君を引き取りに来ました～」
入り口にいたのは青いジャケットを羽織り、その少女は黒いTシャツをその下に着用し、下には紺色のロングスカートを着用していて凍ったような顔色をしていた。上嬢達はその少女に意識を向けた
「ということで、ちょーっと人攫いさせていただくんでよろしくお願いします～」
少女がポケットから取り出したのは水の入ったペットボトルだった。少女はふたを開けて佐天、食蜂、上条、門矢に水をかけた
「それじゃ、レッツフリーズタ～イム！」
その掛け声共に佐天達が凍りつき氷柱の中に閉じ込められた、上嬢は凍りつく直前に上条と分離した為、上嬢のみが凍りつき上条の体が氷柱から投げ出された
「見つけた！それじゃこれはもらっていきますね～って聞こえてないか。とりあえず、これ後で読んどいてくださいね～」
少女は一枚の紙をそこに置くと上条を抱えて本部を後にした。その紙には『上条当麻の最有力嫁候補　雨辺（あまべ）　瑠姫（るき）』と書かれていた。
暫くして氷が水に戻り、食蜂達が解放された。そしてこの紙を拾って食蜂は不敵な笑みを浮かべながらこう言った
「上条さんの嫁最有力候補？あはは、何言ってるんですか。上条さんの嫁はこの私の他に誰がいるんですか？良いでしょうこの正式な上条さんの嫁候補である私が直々に粛清に行ってあげますからねぇ……」

ウフ、ウフフフと不気味な笑いを浮かべつつ不気味なオーラを纏いながら食蜂は雨辺を追った

雨辺は公園で上条の隣でヤシの実サイダーを飲んでいた。
「う……ん？」
雨辺が上条が目を覚ましたのに気がついて上条から自分の顔がよく見えるように上条の膝の上に座り込む
「あ、起きた」
「ってあれ？ここどこだ？てか何で上条さんが女の子と一緒に公園にいるんでせうか？」
雨辺は上条に体を密着させる。上条の心臓の鼓動が速くなり、顔が真っ赤に染まる
「やっぱ押しには弱いんだね」
雨辺は少し笑うと耳を上条の胸に当てた。
「ほら、ここバックンバックン言ってる」
上条に対しゆっくりゆっくりと上条の心の中に侵入してくる雨辺。上条からしてみれば恐怖でしかない。見知らぬ少女に自分の心の中に入り込まれ、自分の思考を支配するような感覚。だが、上条はそれを拒絶できない。気がつけば彼女の体の後ろに手をまわしていた。少女も上条の背後に手をまわした
「私は雨辺瑠姫。よろしくね」
「ああ、俺は上条当麻。よろしくな」
「何やってるんですか！」
上条の思考が一気に正常に戻る。そして声の方向には息を切らした食蜂がいた。髪は乱れ体中びしょぬれだった
「何って恋人同士のスキンシップだけど？」
「こ……恋人って、上条さんは誰とも付き合ってないはずですが？」
「じゃあ、これを見てもそんな事言える？」
雨辺は左手を上条の背中から放して食蜂に見せた。食蜂の視線が真

っ先に行ったのはその薬指。その薬指には銀色の指輪がはめられていた。そして食蜂には見えなかったが、その指輪には『ＴＯＭＡＲＵＫＩ』と黒で彫られていた

第二十四話「奪取された幻想殺し」

食蜂は唖然としたままその場から動かなくなった。何か言葉を発しようとしても言葉にならない。更に雨辺は食蜂に言い続ける

「第一、あなたは当麻の何だって言うのよ。所詮は当麻に救われた身でしょう？そんなのきっとこれから吐いて捨てるくらい出てくるでしょうし、決定打になりえないのよ。そんなのに比べて私は……」

雨辺は上条から離した手を今度は上条の首筋辺りに回して体を更に密着させた。上条の方はというと顔が真っ赤になったままで何とかして雨辺を振りほどこうとするが体に力が入らない。つまりは雨辺のやりたい放題であるという状況が生み出されていた。

「私は当麻の命の恩人で、当麻の最初の仲間よ。当麻が学園都市に来て中学を卒業するまでずっと面倒見てたのよ？一介の仲間でしかないあなたは当麻と出会って精々半年そこらでしかない。一応それでも当麻を沈めかけた所まで行ったのは褒めてあげてもいいわ。でも私は当麻を完全に手篭めに出来る。それに多分もう私で思考が支配されちゃっててきっとあなたがいる事に気付いてないかそれとももう忘れられちゃってるかも？」

その瞬間、食蜂の中で何かが崩れた気がした。

「絶対殺す、上条さんに易々と近寄るこの性悪女がぁ！」

完全にキレた食蜂はザビーゼクターを召喚し変身、キャストオフを済ませると自分の愛する上条を誑かす悪しき女、雨辺に飛び掛った

白井と初春は喫茶店の一角を占拠してとある人物を探していた。常盤台のエースであり学園都市で三番目に優秀な生徒である御坂美琴である。彼女は根岸による事件以降、行方を眩ましていた。携帯には絶対に出ない。寮には帰らない、オマケに学校には無断欠席である。

「まさか、あの類人猿と駆け落ちでも……？」
「まさか～御坂さんがそう簡単に逃げ出すわけないじゃないですか。いくら恋は盲目って言ってもそんな訳ないじゃないですか」
白井は頭を抱えて悩ませていた時だった

白井の背中からサソリの尻尾のようなものが生え、店内の至る所全てをグチャグチャにして白井の背中にその尻尾は納まった。

「あわ、あわわわわわ」
言葉にならない言葉を発している初春を見て白井はこう問いかけた
「あれ？初春、どうしましたの。そんなワームでも見たような顔をして」
そして白井は注文していた紅茶を一口口にした。肝心の張本人はこの騒動に気付けていないようだった

食蜂は攻撃をしていなかった。否、出来なかった。何故なら攻撃をしようとした瞬間、雨辺が上条を盾にしたのだ。上条はと言うと、呆然と空を見つめているだけで特に何もしていない
「さっきまでの余裕はどうしたの？悪いけどこの様子だと絶対忘れられてるわね。じゃそういう事でほら、行きましょう。これからずっと二人で暮らせる場所に」
上条の手を握るために雨辺が上条から手を放した隙を狙って食蜂が上条の右手を上条の頭に移動させた。
「ってあれ？一体何があったんだ？えっと確か雨辺に首の辺りに何かを取り付けられた所から記憶がないな……」
「あーあ。やっちゃった～。よし！それじゃこのまま二人でデートに！それじゃレッツゴー！」
意識を取り戻した上条はあっという間に雨辺に連れて行かれ、食蜂はあまりの速さにそこで呆然とするしかなかった

こうして、上条当麻は『シャドウ』から雨辺の管理下におかれることとなったのに気づくのはもう少し未来の話である

第二十五話「奪回作戦開始」

「あ、建宮さんですか？」
五和は学園都市のオープンカフェで紅茶を飲みながらイギリスの建宮へ電話をかけていた。そのカフェが一カ月ほど前に背中から羽を生やしたイケメンに襲撃された場所であるというのを彼女は知らない
『で、どうなのよ。上条の旦那に会えたのよな？』
「ええ、上条さん本人には少ししか会えなかったんですけど代わりにお母様に会えました」
携帯の向こう側から大声の大歓声が聞こえ、五和は思わず携帯から耳を話してしまった
『よくやったのよ五和！それじゃ頑張るのよな！』
勢いよく切られ、五和が鞄に携帯をしまおうとした時、登録していない番号から着信が入った

食蜂は雨辺にホイホイと付いて行ってしまった上条を取り返すべく、最終兵器（いつわ）に電話をかけ、本人が出た事を確認すると、
「天草十字棲教の五和さんですね？あなたに一つお知らせがあります。上条当麻さんが心ごと持ってかれました。恐らく今夜あたりに関係でも築いてるんじゃないですか？多分そのまま二人はスピードけっこ……」
最後まで言い終わるまでに五和との通話が切れていた
上条当麻を取り返すべく、最終兵器（いつわ）が起動したというのを知った食蜂は少し笑った

五和の手には携帯（正確にはだったもの）が握られ、地面に落ちた。
五和は海軍用船上槍（フリウリスピア）を組み立てると上条を探すべくオープンカフェ

を後にした

上条当麻は雨辺と共にファミレスの一角で食事をしていた。

「でさ、この後どうする？私が昨日考えたお勧めコース行ってみる？」

「いや、俺は他のみんなと何か連絡取ってから俺は回りたいんだけどなって何でコースの中に俺の寮が無くてお前の寮が入ってるんだよ！」

お互いに食事を済ませ後は会計を済ますだけとなっていたその時だった。急に手元に影が差し上条達が見上げるとそこには槍を構えた五和が窓ガラスを槍で突き破りファミレスの中に飛び込んできた

「上条さんを回収しに来ました。なるべく速やかに渡してくれると嬉しいんですけど」

「結構頑張るのね。ならそれなりに抵抗させてもらっていいかしら？」

雨辺が取り出したのは一丁の銃だった。雨辺は中のマガジンを捨てて青いマガジンを装填した

「それじゃあ、大好きな人に殺される恐怖を存分に味わってね♪」

雨辺は五和、正確にはその後ろにいた上条に向けて引鉄を引いた。五和が反応するよりも早く上条は被弾しその場に仰向けに倒れ、背中から魔法陣が展開され上条が収まる程度の大きさになり上条の体が見えない糸で吊られているように起き上がり、上条の姿が人間から龍人へと変わった

「さて神様。あなたの目の前の槍を構えた不信者はどうします？神隠しに合わせましょう！」

雨辺の言葉に呼応するかのように『龍』は手を翳し、五和の居る方向へ魔法陣が展開され光の柱が放たれる。間一髪で五和はよけたが、背後にいた人やら壁やらが消滅していた

「駄目ですね。じゃあこれならどう？」

雨辺は床に水を思いっきりぶちまけ、五和の足元が水浸しになる
「それじゃ、今度こそ死んでくださいね」
雨辺が指を鳴らすと五和の足元が凍りつき、五和の動きが停まった
「一体何を……したんですか……」
「冥土の土産に教えてあげる。私の能力は『絶対零度(アブソリュートゼロ)』。ありとあらゆるものの温度を限界まで下げる能力よ。まあ簡単に言えば私が狙ったものを凍らせる能力ってとこかしら。この街で六番目に強い能力なんだけど液体が無いと攻撃できないって言うのが唯一の欠点ってとこかしらね。あなたみたいな魔術師(バカ)は歩く冷凍庫とでも思っておけばいいわ。それじゃ、さようなら」
雨辺がテーブルを蹴って五和を飛び越して上条の横に降り立つと雨辺が五和に最後の一撃を放つように指示したが、上条は一切動かなかった
「どうしたんですか！消しなさい！あの女をあなたの力で消し去りなさい！」
「そいつは無理なご相談だな」
唐突に聞こえた声の方向を向くとそこには門矢が立っていた
「お前は自分が手にしている力が大きすぎるあまり、こっちにデカイチャンスをくれた。ソイツの両腕を見てみろよ」
雨辺が『龍』の両腕を見るとさっきまでは無かった金色の腕輪が装着されていた。『龍』は門矢の元へ跳ぶと、上条の姿に戻り、上嬢の姿に上書きされた
「さてと、反撃開始って所だな」
門矢達が変身しようとした時だった。雨辺の背後に一体のワームが現れ、両手に付いていた巨大な槍の先端で雨辺の体を貫いた

第二十六話「反転」

ワームが雨辺の体から槍を引き抜くと雨辺が鮮血を周囲に撒き散らしながらその場に倒れる
「お前はもう不要だ。そこでおとなしくくたばっとけ」
ワームは倒れた雨辺に対してそう言ってどこかへと飛び去って行った。門矢はこのワームを別のカブトの世界で目撃した事がある。葡萄虫のワームで個体としての名前はフィロセキラワーム。以前の世界と同じなら、対策を練った方がいいと門矢は同時に思った
「きゃあ！」
上嬢の体が何かに弾き飛ばされ、門矢がそれを受け止めた。門矢がその方向を見ると、『龍』となった上条が立っていた。上条は一瞬で雨辺の元へ移動すると雨辺を抱えあげ、そのままどこかに飛んで行った。この間2～3秒。門矢は直接戦った訳ではないがそれだけでも『龍』の力量を理解できた。
「ありゃ人が対等に接せる相手じゃないな」
門矢は『龍』が飛んで行った青空を仰ぎながらそう呟いた

フィロセキラワームは自分の住みかに戻ると人間の青年の姿に戻り机に足を預ける構図で椅子に腰かけた
「お帰りなさい。で、『龍』はどうだった？」
青年の帰りに気付いた少女が青年にお茶を差し出す。青年はお茶を一口口にすると椅子にもたれかかりながら答えた
「まだ覚醒して間もないから大してよく分かんなかったがあれでも『虎』のお前と同等にやりあえるレベルだと思うな」
「なるほど、私と対極の奴がどんな奴だかと思ってみればただの不幸少年で済ませられる程度じゃないっていうのは確かね」
少女の腕が黒い虎の腕に変わり、少女は軽く素振りをした。青年の

目の前を爪がすれすれで通り青年は危うく自分の顔に傷が着くかと思った
「ったく、あぶねえな。お前はもう少し女の子らしく普通にしてりゃいいのに……」
「化物のあなたに言われたくはないわね。それに私はそう言うのには興味無いの。アイツには私の『妹』が世話になってる訳だし、あなたがやられたら私が出るわ」
「そうかい、んじゃ行ってきますか」
青年がフィロセキラワームへ姿を変えて飛んで行った

上条はカエル顔の医者に雨辺を預けると再び『龍』へと姿を変えてフィロセキラワームを探すべく空高く飛び上がった。この街では能力者がいるのが当たり前とされているので飛んでいる姿を見られてもそう言う能力なのだろうとある程度ごまかしも聞くので上条は気兼ねなく空を飛んでいた。上条は前方に自分の目標を発見すると一気にそこまで距離を詰めて軽く殴り飛ばした。空中での行動は今回が初となるのでそう易々と光の柱を打ち出すとかそういう芸当はできない。ただ単純な肉弾戦のみで相手を倒す必要があった。フィロセキラワームは上条めがけて突進を繰り出した上条はこれを避けたが相手の方が空中戦に慣れているのか少し掠った。それで少々バランスが崩れ姿勢を立て直す時には既に次の一撃が迫っていた。上条は直撃し、一気に高度が下がった。相手はこちらの体を地面に叩きつける為に再度攻撃態勢をとったが、その必要はなく、既に上条は路地裏に落下していた。

上条は人間の状態に戻り表通りに出た上条は少々ふらつきながらも空を見上げフィロセキラワームが飛んで行った方向へと歩き出した

同時刻、五和を助け店の外でその一部始終を見ていた門矢達は上条の落下していった方向にバイクを走らせた

そして同時刻……

「う……ん……？」

学園都市の電撃姫が眠りから目を覚ました

こうして広がりを見せていた世界の破壊者の物語は一気に終焉へと向かう事となるのであった

第二十六話「反転」（後書き）

ついに、禁書目録全２４冊をコンプリートしました！まだ完全に読破はしていませんが、これで原作との矛盾点もある程度解消されると思います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7897t/

とある学生の擬似昆虫（ゼクター）

2011年10月12日01時58分発行